

『太平広記』の「精怪」譚から見た日本の器怪譚と『付喪神記』

本稿は、平成二十七年に東京大学大学院 総合文化研究科（超域文化科学専攻・表象文化論）へ提出した修士学位論文に、レイアウト調整および誤字修正を施したものである。

第1章 器怪研究の問題点

第1節 器怪と中国文献

第2節 日本の器怪譚

第3節 器怪の図にまつわる問題

第2章 中国の器怪譚を読む…『太平広記』を中心に

第1節 「精怪」譚一覧表

第2節 「精怪」譚の分析

(1) 怪異の発生について (2) 怪異の正体について

(3) 怪異の解決について (4) 「精怪」譚の構造

第3節 『捜神記』の器怪譚…「精怪」の枠から外れる器怪譚について

(1) 宝の怪異 (2) 器物の異常な動作

第3章 日本の器怪譚を読む…『今昔物語集』と『化物草紙』

第1節 器物を原因とする怪異

(1) 提の話…『今昔物語集』巻2における「精(たま)」概念

(2) 杓子の話

(3) 銚子の話…怪異を起こした器物の処理について

(4) 案山子の話…偶像の起こす怪異

第2節 器物の姿で現れる怪異

(1) 油瓶の話

(2) 板の話

(3) 単衣の話…予兆から殺人へ

第3節 総括…日本の器怪譚再読

第4節 器怪の図について…『化物草紙』を手がかりとして

第4章 『付喪神記』を読む

第1節 『付喪神記』の特異性

(1) 器物への関心の薄れ (2) 怪異の性質の変遷

第2節 前置きとしての「付喪神」概念

第3節 『付喪神記』における器怪の図

第4節 器怪表象の転換点

第1章 器怪研究の問題点

器怪（器物の妖怪）に関する従来の研究は、主に室町時代の絵巻物『付喪神記』を中心に据える形で行われてきたと言える。中世以前の日本における『付喪神記』以外の器怪譚というと、平安末期の説話集『今昔物語集』や室町後期の絵巻物『化物草紙』に収録されたいくつかの説話しか議論に上っておらず、当時の日本における器怪譚の総数は非常に少ないものと考えられる。

先行研究で指摘されている通り、日本の器怪の源流は中国にある。特に宋（420-479）初期以前の中国の怪異譚を網羅した類書『太平広記』の「精怪」という項目には、数多くの器怪譚が収録されているといわれているものの、ここに本格的に立ち入った研究は未だに見られない。

そこで本論文は、『太平広記』の「精怪」譚を中心に中国における器怪表象の分析を行うことを通じて、日本の器怪表象をその根本部分から読み直すことを目的とする。

第1節 器怪と中国文献

本論文の出発点となる先行研究は、田中貴子「『付喪神記』と中国文献——「器物の怪」登場の背景をなすもの——」（和漢比較文学会編『説話文学と漢文学』、1994年、汲古書院）である。この論文は、器物の妖怪を日本中世独自の発想として扱ってきた先行研究を批判し、器怪の思想的基盤として中国文献の存在を提示した。具体例として示されている中国文献は、御伽草子『付喪神記』以前の平安初期に伝来したことが明らかになっている『捜神記』と『太平広記』で、『捜神記』からは巻12と巻19に見られる変化（へんげ）に関する理論、『太平広記』からは巻371より「姚康成」と巻369より「元無有」の二つの説話が参照されている。しかし、田中の論文は『捜神記』や『太平広記』における特定の記述と『付喪神記』における特定の記述との類似性に軽く言及してい

るだけであって、十分な掘り下げを行っているとは言いがたい。

先に述べた『捜神記』は東晋（317-420）の干宝が編んだ説話集である。六朝志怪と呼ばれる中国でも古い部類の怪異譚が収録されていて、日本語訳としては竹田晃訳『捜神記』（1964年、平凡社）が刊行されている。ものの変化（へんげ）一般に関する理論的な記述の存在が注目されている資料であるが、器物にまつわる怪異譚もいくつかが収録されている。『捜神記』には五代（907-959）ないし宋（960-1278）以後の人の作とされる「八卷本」と呼ばれるものも存在しているが、本論文で単に『捜神記』と述べる場合はいわゆる「二十卷本」を指している。

『太平広記』は全五百巻に及ぶ中国の類書であり、978年に完成したとされる。先の『捜神記』を含む数多くの説話集から引用された怪異譚が、独自の分類によって配列され、出典とともに記録されている。『太平広記』の中で特に「精怪」と題された項目（巻368-373）には器怪譚が多く収録されているといわれているが、全文に及ぶ日本語訳が未だ存在しないことも影響してか、先行研究で参照されているのは「精怪」譚の中でもごく一部の説話のみとなっている。日本の器怪表象の根本に中国器怪譚の存在が指摘されていながらも、その中国器怪譚そのものを読み解く作業がおろそかになっているというのが日本の器怪研究の現状であると言える。そこで、本論文は『太平広記』の「精怪」全9話を対象として網羅的な分析を行うこと、また、それを通じて日本の器怪表象における原初的な部分について理解を深めて再検討を行うことをその目的とする。

第2節 日本の器怪譚

『付喪神記』の書かれたとされる室町時代以前の日本の器怪譚として、管見の限りで先行研究に参照された例が見受けられるのは、平安末期の説話集『今昔物語集』

③ 卷27第6の提(ひざび)の話、第19の油瓶(あぶらかめ)の話ならびに第25の板の話、そして室町後期の絵巻物『化物草紙』^④における杓子の話、銚子の話、秦山子の話である。器物と関係のない怪異譚が同時代の説話集に多数収録されている一方で、器物に関するものがこれだけしか参照されていないことは、日本の器怪譚の総数の少なさを物語っているといえるだろう。先行研究では器怪の概念を当時の日本人の間で流布していたものとして論じる傾向があるが、この一次資料の少なさからして、器怪の概念は当時の日本人にさほど浸透していなかったと考える方が自然ではないだろうか。

本論の目的は器怪表象の源流部分の再解釈であるため、日本の器怪譚の中でも室町時代以前の器怪譚に特に焦点を当てており、単に「日本の器怪」とだけ書いた場合でも基本的には中世以前の器怪のみを指している。最終章で少し触れるが、近世以降の日本の器怪表象は媒体も性質も複雑化していて、必ずしも中世以前のものとして並列して語ることができないからである。

参考までに、本節冒頭に挙げた六つの説話の具体的な内容をここで一通り紹介しておく。これらの詳しい分析は第3章で行う。

まずは、これらの中では最もよく引用されている『今昔物語集』の提の話を挙げよう。

(要約)

今は昔、南の山で長三尺許の太った五位が時々歩いている。陰陽師に、祟りをなすかどうか問うと、これ

① 本論文では、阪倉篤義、本田義憲、川端善明校注「新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部三」(1981年、新潮社)を参照している。

② 本論文では、島田修二郎編「新修 日本絵巻物全集 別巻2 天神縁起絵巻 八幡縁起 天稚彦草紙 鼠草紙 化物草子 うたたね草紙」(1981年、角川書店)に収録された翻刻を参照している。

は「物の気」だが害は無いと占う。その「霊」はどこにあるのか、また何の「精(たま)の者」なのかと問うと、銅(あかがね)の器(うつはもの)の「精」で、土の中にいるという。占いに当たった場所を二三尺と五六寸ほど掘ると、五斗(ごりつと)入るくらいの銅の提が出てきた。その後、五位が歩くことはなくなったので、その銅の提が人に成って歩いていたのだろう。気の毒なことだ。

これを思うに「物の精」はこのように人に成って現れると、皆が知ったと、語り伝えられている。続いて、同じく『今昔物語集』より、提の話ほどではないがいくつかの先行研究に引用されている油瓶の話を示す。

(要約)

今は昔、大臣が帰宅中に小さな油瓶が跳ねて行くのを見かけて、これは「物の気」だろうかと思っていると、その油瓶は人家の門の鉤穴に入ってしまった。後に人を遣わせて聞いたところ、その家の娘は病気であったが今日亡くなったそうで、やはり先ほどの油瓶は「物の気」で、鉤穴から入って殺したのだろうと思われた。これをご覧になった大臣も只者ではない。そういうわけで、このような「物の気」は様々な物の形で現れるものだ。思うに、恨みでもあったのだろうか。このように語り伝えられている。

次に挙げる『今昔物語集』の板の話は、さほど引用はされていないが、油瓶の話と近い構造となっている。

(要約)

今は昔、二人の侍が宿直していると、夜更けに棟の上からとつぜん板が顔を出す。「あんな所に板が出て

くるわけがない、誰かが放火するために屋根の上に登

ろうとしているのだろうか、だがそれなら下から板を立てて登るはずなのに、これは上から板が出てきている、わけがわからない」と言っているうちに、板は次第に伸びてきて七八尺ほどになる。板はひらひらと飛

んで二人の方へ来たので、「これは「鬼」に違いない、近くに來たら切ろう」と構えていたが、そこへは来ないで、板は格子の隙間にこそそこそと入って行った。その向こうで寝ていた他の侍は「物」に襲われた人のように二三回うめいて、音がしなくなったので、他の人たちを起こして見に行つたところ、真つ平らに圧殺されていた。板は外に出たようにも見えず、どこにも見当たらなかった。人々はこれを見て限りなく恐れた。

これを思うに、二人の侍は太刀を持って切ろうとしたので近寄れず、油断して寝ていた者のほうを殺したのだろう。この家に「鬼」がいると知られるようになったのはこの事件の後なのか、それとも元々そういう所だったのか、詳しくは分からない。そういうわけで、男は刀を身につけておくべきだ。当時の人は皆この事件を聞いて、刀を身につけるようになったと、語り伝えられている。

時代が下り、『化物草紙』の杓子の話は以下のような内容である。

(要約)

荒れた家に住む女がいた。かち栗を食べていると、炭櫃から白々とした手が出て乞うようにする。不思議であったが、手がかわいらしいのでそれほど恐ろしくも思わず、ひとつ与えると、それを引き入れ、また差し出して乞う。四五回繰り返すと見えなくなった。不思議に思い、翌朝その下を見ると、白く小さい杓子が落ちて挟まっていた。与えた栗もそのままそこにあつ

た。不思議なことであった。

続いて、『化物草紙』の銚子の話を示す。

(要約)

女たちが住んでいた。皆が寝静まり一人で念仏を唱えていたところ、遣戸の開いたところから耳の長い法師が頭を少し出して、覗いては引つ込むのを繰り返した。たいへん恐ろしくて、盗人などが潜んで寝るのを待っているのかなどと考えるとどうしようもなく、ほかの者を起こして見に行かせたが、誰もいない。別の夜にも同様に法師が覗いたので重ね重ね不思議に思つて、翌朝によく見ると、いつの時代のものであろうか、朽ちて柄も折れた銚子があつた。これが化けたのだと思ひ、捨ててしまった後には覗く者はいなくなつた。

最後に、『化物草紙』の案山子の話を紹介しておく。

(要約)

昔ある山里にひとり住む女がいた。秋風も身に沁み、心細く感じるままに、田んぼの前に立つて、案山子でも来て私の夫になってよと言つた。かくして、ある夕暮れに門のほうから揉烏帽子をかぶつて弓矢を持った者が、宿を借りようと言つたので、宿らせて、とかく言い寄つて、その夜は語らい明かした。かくして毎夜通うようになった。ある朝、様子がおかしいので、長い糸を帰る折に繋げて見たところ、そろそろと歩いて、止まったところを見ると、田んぼの中にある案山子であつた。重ね重ね恐ろしく、驚くべきことであつた。化けて現れたと思つただろうか。その後は現れなかつたそうだ。

第3節 器怪の図にまつわる問題

一般的に「器物の妖怪」と聞いて想像される図は、『土蜘蛛草子』や『泣不動縁起絵巻』、『融通念仏縁起絵巻』あるいは『百鬼夜行絵巻』といった絵巻物に描かれているような、器物そのものに目鼻や胴体が付け加えられたような形態のものではないだろうか。実際に、多くの先行研究がこれらを「器物の妖怪」を描いたものとして扱っている。しかし前節で見たように、『今昔物語集』と『化物草子』で記述された器怪の形態は太った五位や耳の長い法師のようなほぼ人型の姿や、白い手だけの姿、あるいはごく普通の油瓶や板の姿であって、先に挙げたような一般的な器怪イメージとは全く異なるものであった。両表象は「器物の妖怪」という多義語に包括されてしまうがゆえに混同されがちであるが、前者は画像情報のみを根拠に器物の妖怪として認識されているもの、後者は文字情報を根拠に器物の妖怪であると判断できるものであつて、これらはその根源を異にしている。

詳しくは第3章第4節で改めて論じるが、本論文ではひとまずこれらを別々のものとして考える態度を明示し、単に「器物の妖怪」などという場合は文字情報としての器怪のみを指すこととする。なお、中国の『太平広記』や『搜神記』等に収録された器怪譚はどれも文字情報のみのものである。

第2章 中国の器怪譚を読む…『太平広記』を中心に

本章の目的は、多数の説話を俯瞰するマクロな視点で中国器怪譚の持つ傾向を読み取り、日本の器怪譚を読み解く上での指標とすることである。したがって、各説話からはあくまでも「精怪」譚として重要と考えられる要素のみを抜き出し、それ以外の多くの要素を削ぎ落とす形で分析を行うこととなった。

第1節 「精怪」譚一覧表

李昉等編『太平広記四』（1959年、人民文学出版社）を参照して、『太平広記』における「精怪」譚の一覧表を作成した。引用に際して字体は適宜改めた。

本論文において「精怪」譚とは、『太平広記』の編者によって「精怪」と題された卷388~392に収録された説話を指している。また、『太平広記』における分類としての「精怪」は現在中国で一般的に知られている精怪よりも狭い概念であるため、鉤括弧を付けて区別して扱っている。

以下に表の読み方を記す。詳しい解説や分析は次節以降で行っていく。

・「番号」……卷388「精怪一」から卷373「精怪六」までの5話に対し、収録された順番で【一】から【五十四】の番号を振った。そのうち5番目の「張不疑」については「又」という形で区切られて類話が収録されているので、これらを【四十六(二)】と【四十六(三)】に分けて表記した。これにより、「精怪」譚は実質的に全55話となっている。

・「題名」……『太平広記』では説話ごとに題名が付けられているので、それを記載した。

・「小分類」……『太平広記』の編者によって「精怪」の下位に設定されている分類で、「雑器用」「偶像」「凶器」「火」「土」の五種類がある。卷388のみ「雑器用」と「偶像」の境目が明記されていないため、内容から判断して【一】から【九】までと【十四】を「雑器用」、【十】から【十三】までと【十五】を「偶像」とした。

表1 「精怪」書誌情報一覧

番号	題名	小分類	出典	編者	時代	現代語訳
【一】	陽城縣吏	雑器用	搜神記	干宝	東晋	竹田晃訳『搜神記』1964年
【二】	桓玄	雑器用	統齊諧記	吳均	梁	
【三】	徐氏婢	雑器用	異苑	劉敬叔	宋	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年
【四】	江淮婦人	雑器用	幽明録	劉義慶	宋	前野直彬他訳『幽明録・遊仙窟他』1965年
【五】	劉玄	雑器用	集異記	薛用弱		井波律子『中国幻想ものがたり』2000年
【六】	游先朝	雑器用	集異記	薛用弱		
【七】	居延部落主	雑器用	玄怪録	牛僧孺	唐	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説選』1968年
【八】	僧太瓊	雑器用	西陽雜俎	段成式	唐	今村与志雄訳『西陽雜俎4』1981年
【九】	清江郡叟	雑器用	宣室志	張説	唐	
【十】	韋訓	偶像	広異記	戴孚	唐	諏訪春雄『靈魂の文化誌』2010年
【十一】	盧賛善	偶像	広異記	戴孚	唐	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年
【十二】	柳崇	偶像	朝野僉載	張鷟	唐	
【十三】	南中行者	偶像	玉堂間話	王仁裕	五代	
【十四】	麴秀才	雑器用	開天伝信記	鄭棨	唐	
【十五】	虢国夫人	偶像	大唐奇事	馬総	唐	
【十六】	蘇丕女	雑器用	広異記	戴孚	唐	
【十七】	蔣惟岳	雑器用	広異記	戴孚	唐	
【十八】	華陰村正	雑器用	西陽雜俎	段成式	唐	今村与志雄訳『西陽雜俎4』1981年
【十九】	韋諒	雑器用	広異記	戴孚	唐	
【二十】	東萊客	雑器用	宣室志	張説	唐	
【二十一】	交城里人	雑器用	宣室志	張説	唐	
【二十二】	岑順	雑器用	玄怪録	牛僧孺	唐	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年
【二十三】	元無有	雑器用	玄怪録	牛僧孺	唐	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年
【二十四】	李楚賓	雑器用	集異記	薛用弱		
【二十五】	国子監生	雑器用	西陽雜俎	段成式	唐	今村与志雄訳『西陽雜俎4』1981年
【二十六】	姚司馬	雑器用	西陽雜俎	段成式	唐	今村与志雄訳『西陽雜俎4』1981年
【二十七】	崔穀	雑器用	宣室志	張説	唐	
【二十八】	張秀才	雑器用	宣室志補遺			
【二十九】	河東街吏	雑器用	宣室志	張説	唐	諏訪春雄『靈魂の文化誌』2010年
【三十】	韋協律兄	雑器用	玄怪録	牛僧孺	唐	

【三十一】	石從武	雜器用	桂林風土記	莫休符	唐	
【三十二】	姜修	雜器用	瀟湘錄	李隱		
【三十三】	王屋薪者	雜器用	瀟湘錄	李隱		
【三十四】	独孤彦	雜器用	宣室志	張誥	唐	
【三十五】	姚康成	雜器用	靈怪集	張薦	唐	
【三十六】	馬拳	雜器用	瀟湘錄	李隱		
【三十七】	吉州漁者	雜器用	玉堂閒話	王仁裕	五代	
【三十八】	梁氏	凶器	洛陽伽藍記	楊銜之	東魏	入矢義高訳注『洛陽伽藍記』1990年
【三十九】	曹惠	凶器	玄怪錄	牛僧孺	唐	
【四十】	竇不疑	凶器	紀聞			
【四十一】	桓彦範	凶器	広異記	戴孚	唐	
【四十二】	蔡四	凶器	広異記	戴孚	唐	
【四十三】	李華	凶器	広異記	戴孚	唐	
【四十四】	商鄉人	凶器	広異記	戴孚	唐	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年
【四十五】	盧涵	凶器	伝奇	裴鏘	唐	前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年
【四十六 (1)】	張不疑	凶器	博異志	鄭還古	唐	
【四十六 (2)】	張不疑	凶器	靈怪集/博異志	張薦/鄭還古	唐	
【四十七】	賈耽	火	芝田錄			
【四十八】	劉希昂	火	博異志	鄭還古	唐	
【四十九】	范璋	火	酉陽雜俎	段成式	唐	今村与志雄訳『酉陽雜俎4』1981年
【五十】	胡榮	火	祥異集驗			
【五十一】	楊禎	火	慕異記			
【五十二】	盧郁	火	宣室異錄記			
【五十三】	劉威	火	稽神錄	徐鉉	宋	
【五十四】	馬希範	土	稽神錄	徐鉉	宋	

表2 「精怪」怪異一覧

番号	[発生]怪異の内容	[発生]怪異の属性	呼称
【一】	拍手や会話をする声が聞こえる	音声/名前	怪
【二】	子供二人（黒）が歌で予言をする	変化（子供）/詩歌/予兆	-
【三】	病気になり、異常に掃除をする	病気	-
【四】	美童二人が現れる	変化（子供）	-
【五】	顔のない者（黒）が火を持ってくる	変化	魅
【六】	人（赤）が現れる	変化	魅
【七】	数十人が人を呑み吐きする	変化/名前	怪
【八】	乳児が空から落ちてくる	変化（子供）	-
【九】	地中からの声で病気になり、夢に男（青）が現れる	音声/病気/夢（男）	-
【十】	身長三丈の女（赤）が暴れる	偶像変化（女）	鬼/怪
【十一】	女が現れる	偶像変化（女）/病気	祟
【十二】	頭に痛いできものができる	病気	-
【十三】	女が行者を誑かす	偶像変化（女）/病気	怪
【十四】	書生が来訪する	変化/名前	妖魅
【十五】	猿が美しい子供になり、その後また猿になる	偶像変化（動物/子供）	-
【十六】	人形が出歩き、病気にさせる	偶像動作/病気	-
【十七】	七人が家に入ってくる	変化	鬼神/怪
【十八】	子供たちが火を集めて戯れる	変化（子供）	魅
【十九】	「小鬼」が行き来する	変化	鬼
【二十】	犬の音がして、とても小さい犬（青）が走り回る	音声/偶像変化（動物）	-
【二十一】	怪異を見た者が病む、巨人（赤黒）が現れる	変化/病気	怪
【二十二】	太鼓の音がする、甲冑の人が夢に出る、小人が合戦する	音声/夢/変化/病気	-
【二十三】	四人（黒、黄、黒）が詩を吟じる	変化/詩歌	-
【二十四】	病気になる、大きな鳥が現れる	病気/変化（動物）	妖魅/精怪
【二十五】	乱れた髪の子供が現れ、発光する	変化（子供）	-
【二十六】	精神に異常、二つの手が現れる、牛のようなものが現れる	病気/変化（動物）/名前	鬼神/魅
【二十七】	子供（黄）が詩を見せてくる	変化（子供）/詩歌	怪
【二十八】	道士と僧徒十五人ずつと、二十一眼の「物」二体が現れる	偶像変化/変化	妖怪
【二十九】	うずくまる人（黒白）がいる	変化	-
【三十】	池から一尺余の子供（黒）が来る	変化（子供）	怪物/妖

【三十一】	病気になる、光る人が来る	病気/変化	精物
【三十二】	小さくて太い客（黒）が来る	変化/名前	-
【三十三】	老僧（仏教）と道士（道教）が争う	変化	精怪
【三十四】	二人の男（黒、青）が来る	変化（男）/名前	怪
【三十五】	三人が詩を吟じる	変化	魅精
【三十六】	買った碁盤がなくなり、現れた翁と会話する	変化（男/老人）	精怪
【三十七】	川に異変が起こる	変化？	-
【三十八】	亡き夫、馬、従者数人が来る	偶像変化（男/動物）	-
【三十九】	木偶が動いて喋る	偶像動作/名前	怪
【四十】	身長二丈の「鬼」が出る	偶像変化	鬼/魅
【四十一】	矛を持った一丈余の物が現れる	偶像変化	-
【四十二】	「鬼」と交流する	偶像変化/名前	鬼/鬼神
【四十三】	老人が石を投げってくる	偶像変化？（男/老人）	-
【四十四】	「鬼」の塚で明器が謀反を起こす	偶像動作	-
【四十五】	墓守が蛇の血を酒にする、大男、大きな物（白）が追う	偶像変化（女）/詩歌	怪魅
【四十六 (1)】	買った下女を尊師が怪しむ	偶像変化（女）/名前/詩歌	怪物
【四十六 (2)】	買った下女を道士が怪しむ	偶像変化（女）/名前	-
【四十七】	尼（赤）二人がやって来る	変化？（女）/予兆	-
【四十八】	厠から声がする、小人、槍を持つ騎馬、女（白）が現れる	音声/変化（動物、女）/予兆	-
【四十九】	物音がする、物資が積まれる、子犬のようなものが現れる	音声/変化（動物）	-
【五十】	「精物」が家に現れ、変化して騒ぐ	変化（子供/女）/予兆	精物
【五十一】	歌う者（赤）が現れる	変化/詩歌	-
【五十二】	火を呑む姥と会う、火事が起こる	変化（女/老人）/名前	-
【五十三】	火を持って夜行する者と出会う	変化	-
【五十四】	十丈余りで頭尾手足もない土山のような物が現れる	変化/予兆	-

表3 「精怪」正体一覧

番号	[判明]正体	[判明]所在	[判明]正体の属性
【一】	枕、杓文字	頭の下、竈の下	所有/埋没
【二】	漆塗りのばち一組	楼閣の下	経年/埋没
【三】	箒	壁の隅	-
【四】	箒	家の後ろ	-
【五】	祖父の時代の枕	-	経年
【六】	靴	-	所有
【七】	木の檻に入った皮袋数千枚	古家の地中	動物/経年/埋没
【八】	古びた箒	袖の中	経年
【九】	鐘（青）	地中	経年/埋没
【十】	破れた絹の人形（赤）	糞堆の中	布/偶像（女）/破損/埋没
【十一】	陶器の人形	寺	陶磁器/偶像（女）/経年/所有
【十二】	陶器の人形（緑）	窓の下	陶磁器/偶像（女）
【十三】	塑像	堂	偶像（女）
【十四】	瓶の蓋（と酒瓶？）	階下	-
【十五】	木の人形	室内	植物/偶像
【十六】	桃の符、絹の人形七体	糞土の中、岩屋の中	植物/布/偶像（女）/経年/埋没
【十七】	壊れた車輻七本	庭の地中	破損/埋没
【十八】	壊れた車輪六七片	橋？	植物/破損
【十九】	古い扉	階下の地中	経年/埋没
【二十】	「狗」（青）	門の上	偶像（動物）
【二十一】	囲いのギンモクセイ	城の周り	植物
【二十二】	金の将棋盤	古い墓	金属/経年/埋没
【二十三】	古い杵、灯台、水桶、壊れた鍋	空家	経年/破損
【二十四】	唐白を支える木柱の基石？	壊れた家	経年
【二十五】	栗がついた古びた木杓	室内	植物/経年
【二十六】	皮袋のようなもの（黒）、竹籠に入った衣（黄・黒）	家の隅	動物？/布/所有
【二十七】	筆	垣の下の穴の中	新品/埋没
【二十八】	朽ちた袋に入った駒三十個、さいころ一对	壁の隅	偶像/経年
【二十九】	泥（白）のついた漆桶	地中	埋没

【三十】	脚が一本欠けた古い鉄鼎	化物屋敷	金属/経年/破損
【三十一】	古い樟木の灯火	家の中	植物/経年
【三十二】	割れた古い酒甕	-	経年/破損
【三十三】	鉄の錘（かね）と亀の背骨	地中？	金属/埋没？
【三十四】	甌（こしき）、鉄杵	朽壊したものの中	金属/経年/破損？/埋没
【三十五】	鉄の銚子、壊れた笛、すり減った箒	空家	金属/破損
【三十六】	碁盤	室内	所有
【三十七】	鐘（竜頭）	-	-
【三十八】	桃の人形、茅の馬、蒲の人形	庭	植物/偶像（動物）
【三十九】	明器だった木偶二体	家	植物/偶像/経年/所有
【四十】	荊で編まれた「方相」	崖下	植物
【四十一】	朽ちた「方相」	古い穴の中	破損/経年/埋没
【四十二】	明器数十個	廃れた墓	経年/埋没
【四十三】	木の明器	垣の上	植物
【四十四】	金銀でできた明器の人馬	墓の中	金属/偶像（動物）/埋没
【四十五】	大きな明器の下女、大きな「方相」の骨、白骨	林	偶像（女）
【四十六 (1)】	朽ちた明器	-	植物/偶像/経年
【四十六 (2)】	明器	-	植物/偶像（女）
【四十七】	-	-	-
【四十八】	火	厠の前	-
【四十九】	火	-	-
【五十】	-	-	-
【五十一】	灯	-	-
【五十二】	火を帯びた石	穴の中	埋没
【五十三】	棺の板、朽ちた木、壊れた箒のたぐい	-	植物/経年/破損
【五十四】	-	-	-

表4 「精怪」対処と話型一覧

番号	<攻撃>方法	<処置>方法	話型
【一】	-	焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【二】	-	-	[発生]→[判明]
【三】	-	焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【四】	-	焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【五】	刃物	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【六】	刃物	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【七】	-	焼く（流血、断末魔）	[発生]→[判明]→<処置>
【八】	-	-	[発生]→[判明]
【九】	-	夢の指示通りに移動させる	[発生]→[判明]→<処置>
【十】	-	焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【十一】	-	砕く（流血）	[発生]→[判明]→<処置>
【十二】	-	砕く、焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【十三】	-	壊す	[発生]→[判明]→<処置>
【十四】	刃物	その瓶の酒を飲む	[発生]→<攻撃>→[判明]→<処置>
【十五】	射る	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【十六】	斬る（流血）、焼く（異臭）		特殊（偶像動作）
【十七】	枕で打撃	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【十八】	射る（木の音）	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【十九】	-	-	[発生]→[判明]
【二十】	投石	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【二十一】	射る（流血）	焼く	[発生]→<攻撃>→[判明]→<処置>
【二十二】	-	焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【二十三】	-	-	[発生]→[判明]
【二十四】	射る（流血）	焼く	[発生]→<攻撃>→[判明]→<処置>
【二十五】	-	-	[発生]→[判明]
【二十六】	刃物（流血）	焼く（異臭）	[発生]→<攻撃>→[判明]→<処置>、[発生]→[判明]
【二十七】	-	使用する	[発生]→[判明]→<処置>
【二十八】	枕を投擲	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【二十九】	-	-	[発生]→[判明]
【三十】	-	砕く（流血）	[発生]→[判明]→<処置>

【三十一】	射る	裂く、焼く、灰を川に流す	[発生]→<攻撃>→[判明]→<処置>
【三十二】	石に当たり自滅 (音)	-	[発生]→<攻撃?>→[判明]
【三十三】	-	-	[発生]→[判明]
【三十四】	-	-	[発生]→[判明]
【三十五】	-	傷つけずに他の所に埋める	[発生]→[判明]→<処置>
【三十六】	-	古鏡で照らすと落ちて碎ける、焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【三十七】	-	-	[発生]→[判明]
【三十八】	射る	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【三十九】	-	?	特殊 (偶像動作)
【四十】	射る	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【四十一】	枝で打撃	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【四十二】	-	焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【四十三】	射る	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【四十四】	刃物	-	特殊 (偶像動作)
【四十五】	-	裂く、焼く、堀に投げ込む	[発生]→[判明]→<処置>
【四十六 (1)】	-	斬る (流血)、焼く	[発生]→[判明]→<処置>
【四十六 (2)】	杖で打撃 (木の音)	?	[発生]→<攻撃>→[判明]
【四十七】	打撃 (流血)	-	[発生]→<攻撃 (失敗)>→(火事)
【四十八】	-	-	[発生]→[判明]→(火事)
【四十九】	不明	-	[発生]→<攻撃>→[判明]
【五十】	-	-	[発生]→(火事)
【五十一】	-	撲滅	[発生]→[判明]→<処置>
【五十二】	-	-	[発生]→(火事)→[判明]
【五十三】	射る	-	(火事)→[発生]→<攻撃>→[判明]
【五十四】	-	-	[発生]

・「出典」……『太平広記』に収録された説話には出典が付記されているので、それを記載した。【八】の出典は「陽西雜俎」となっていたが、「酉陽雜俎」の誤植であると判断し、これに改めた。【三十】の出典は元々「異怪録」とされていたものが後に「玄怪録」へ改められたと記述されており、前者の存在は確認できなかったため後者のみを記した。【四十六】の出典のひとつは「博異記」とされているが、「博異記」は「博異志」と同一のものであるので、「博異志」に統一して表記した。

・「编者」、「時代」……「出典」に記載した資料の编者と、その資料の編まれた時代を、分かる限り記した。

・「現代語訳」……『太平広記』の全訳は存在しないものの、説話単位では日本語の現代語訳または要約が存在しているものがある。確認できたものについてはそれを記載しておいた。

・「発生」怪異の内容」……物語中における怪異発生の記述に関して、その内容の要約を記した。

・「発生」怪異の属性」……怪異の内容について、その属性を独自に抽出したものである。まず怪異の種別として、ものが姿を変えて現れる「変化」、怪しい声や音を発する「音声」、身体や精神を蝕む「病気」、夢の中で姿を変えて現れる「夢」、何かをかたどった偶像が姿を変えて現れたように語られる「偶像変化」、偶像そのものが動いたり話したりする「偶像動作」を設け、「変化」の中でもその形態が特筆されているものには「女」、「男」、「子供」、「老人」、「動物」を括弧内に記した。また付属的な要素として、怪異がそれ自身の固有名を名乗るものに「名前」、怪異が詩や歌を詠むものに「詩歌」、災害や死の予兆として現れたと解釈できるものに「予兆」の属性表記を付した。

・「呼称」……『太平広記』の「精怪」譚において怪異や妖怪を表現する言葉は必ずしも「精怪」ではなく、説

話ごとに様々な呼称が用いられているので、それを抜き出した。

・「判明」正体」……それぞれの物語内で怪異の原因として記述された具体的な事物について、それが何であったかを記録した。

・「判明」所在」……怪異の正体とされるものがどのような場所で発見されたかを、要約して記載した。

・「判明」正体の属性」……怪異の正体とされたものについて、その属性を独自に抽出したものである。まず、素材が特筆されているものについては「植物」、「陶磁器」、「布」、「動物」、「金属」に分けて記した。人形や像など「偶像」に該当することが読み取れるものに関しては、これをその形態とともに記した。また、もの状態に関して、古いことや朽ちていることが明記されているものに「経年」、壊れたり欠損しているものに「破損」、新しいものに「新品」、人の持ち物として現役で使用されているものに「所有」、土の中や何かの下などから発見されるものに「埋没」の属性を付記している。

・「攻撃」方法」……怪異に対して人間側から攻撃行動が行われた場合に、その手段が何であったかを記載した。攻撃を受けた怪異側の様子に特筆すべきものがある場合は括弧内に注記した。

・「処置」方法」……怪異の原因であると判明した物に対して、何らかの処置が行われた記述がある場合、その内容を要約して記した。処理される物が何らかの反応を示した場合、その旨を括弧内に付け加えた。

・「話型」……説話ごとの話の流れを独自に形式化したものである。まず怪異が発生し、その後で正体が判明するという基本の構造を「発生」↓「判明」という形で表記する。さらに、その怪異現象を解決するためになされる行動として、正体判明前の怪異に働きかける「攻撃」と、判

明後の正体に働きかける（処置）とを取り上げ、話型を構成する要素とした。また、一部の説話に共通項として見られる火災のモチーフを（火事）として記した。

第2節 「精怪」譚の分析

本節では、前節の一覧表に示した諸要素に沿って原文を提示しながら説話群の分析を行い、「精怪」譚全体にどのような傾向があるのかを探ってゆく。

(1) 怪異の発生について

まずは、怪異の種別として設けた「変化」「音声」「病氣」「夢」「偶像変化」「偶像動作」について、それぞれの特徴を確認していこう。

「変化（へんげ）」はものが一時的に姿を変えて現れる（つまり化ける）怪異で、「精怪」譚の大半を占めている。実際の物語上では、最初は人間や動物ないし異形の怪物の姿で現れ、読み進めていくことでそれが実は「変化」であったと判明するようになっていくため、怪異が発生した段階ではまだそれが「変化」なのかどうかは分からない。例えば【二】「桓玄」は以下のような話である。

（原文）

東晋桓玄時。朱雀門下。忽有兩小兒。通身如墨。相和作芒籠歌。路边小兒從而和之數十人。歌曰。芒籠茵。繩縛腹。車無軸。倚孤木。声甚哀楚。聽者忘婦。日既夕。二小兒還入健康具。至閣下。遂成一双漆鼓槌。鼓吏列云。槌積久。比恒失之而復得。不意作人也。明年春而桓玄敗。言車無軸。倚孤木。桓字也。荊州送玄首。用敗籠茵包裹之。又以芒繩束縛其尸。沈諸江中。悉如童謡所言爾。

まず黒い子供二人がいわゆる童謡（わざうた）を歌う

場面が描かれ、その子供を追跡した結果として、彼らの正体が漆塗りの鼓槌（ばち）一組であったと判明する。ここで、そのばちが一時的に子供の姿になって現れていたのだということが読者にも登場人物にも理解されるのである。物語が「変化」の怪異を描くためには、その正体が明らかになるという場面の存在が必要条件であるといえるだろう。

これが、「音声」や「病氣」の怪異の場合には異なってくる。これらは発生した時点でどのような怪異であるかが確定するため、語りの構造上必ずしも正体の判明を必要とはしていないように思われる。しかし、一覧表で「音声」を含む6例と「病氣」を含む5例（「音声」との重複含む）、いずれも具体的な原因となるものの存在が物語内で明かされている。音声の怪異として【一】「陽城縣吏」を例示しよう。

（原文）

魏景初中。陽城縣史家有怪。無故聞拍手相呼。伺無所見。其母夜作勸。就枕寢息。有頃。復聞籠下有呼曰。文約。何以不見。頭下応曰。我見枕。不能往。汝可就我。至明。乃飯甬也。即聚燒之。怪遂絶。

何か拍手や会話をするような音声だけが聞こえ、その姿は見えないという怪異が起こる。これだけでも音の怪を伝える怪異譚としては成り立っているが、この物語では声の内容を聞き取って捜索することによって、その正体を枕と杓文字であると見出すところまで語られている（正確には、その後それを焼いてしまう描写があるが、この要素に関しては後で触れる）。「変化」譚のような構造上の必要性はないように見えるにもかかわらず、「音声」「病氣」の怪異を語る「精怪」譚に（ことごとく正体判明の要素が盛り込まれている理由は、これらの説話の

主眼が単に怪音や怪病の発生を記述することではなく、それらの怪異が具体的な何かしらによって引き起こされたものであったという部分を記述することにあつたからではないだろうか。「精怪」譚においては「音声」や「病氣」として発生する怪異も、「変化」と同様にその正体が判明する記述を必要としていたのである。

「偶像変化」に分類した説話は、これも「変化」譚と近い構造ではあるものの、正体が偶像であるがゆえに怪異の現れ方が狭まっているものである。まずは【十】「韋訓」を見てみよう。

(原文)

唐京兆韋訓。暇日於其家学中誦金剛經。忽見門外緋裙婦人。長三丈。踰牆而入。遙捉其家先生。為捽髮曳下地。以手捉訓。訓以手抱金剛經遮身。倉卒得免。先生被曳至一家。人隨而呼之。乃免。其鬼走入大糞堆中。先生遍身已藍澱色。舌出長尺余。家人扶至学中。久之方蘇。率村人掘糞堆中。深數尺。乃得一緋裙白衫破帛新婦子。焚於五達衢。其怪遂絕焉。

「夢」は【九】「清江郡叟」と【二十二】「岑順」の二例にのみ適用した怪異種別である。「変化」が現実世界に出現するのに対して、同様のものが夢の中に現れてくる例を「夢」とした。ここでは【九】「清江郡叟」を例に挙げる。

(原文)

唐開元中。清江郡叟常牧牛於郡南田間。忽聞有異声自地中發。叟与牧童数輩。俱驚走辟易。自是叟病熱且甚。僅旬余。病少。夢一丈夫。衣青襦。顧請叟曰。遷我於開元觀。叟驚而寤。然不知其旨。後数日。又適野。復聞之。即以其事白於郡守。封君怒曰。豈非昏而妄乎。叱遣之。是夕。叟又夢衣青襦者告白。吾委跡於地下久。汝速出我。不然得疾。叟大懼。及曉。与其子偕往郡南。即鑿其地。約丈余。得一鍾。色青。乃向所夢丈夫色衣也。遂再白於郡守。郡守置於開元觀。是日辰時。不擊忽自鳴。声極震響。青江之人。俱異而驚歎。郡守囚其事上聞。玄宗詔宰臣林甫写其鍾樣。告示天下。

夢の中に青い服の男が現れて頼み事をしてくるが、地中から掘り出したその正体は同じ青色をした鐘であつた。つまり現実世界の鐘が主人公の夢の中に人間の姿となって現れた話である。仮の姿となって現れるという点で「変化」と似ているが、現れる場所が根本的に異なっているために別分類とした。

身長三丈の赤い裳裾の女が人を襲うという怪異が発生し、その正体は同様に赤い裳裾を着た絹の人形であつたという話である。続いて【三十八】「梁氏」を示す。

(原文)

後魏洛陽阜財里。有開善寺。京兆人韋英宅也。英早卒。其妻梁。不治喪而嫁。更納河内向子集為夫。雖云改嫁。仍居英宅。英開梁嫁。白日来婦。乘馬。将数人。至於庭前。呼曰。阿梁。卿忘我也。子集驚怖。張弓射之。応箭而倒。即變為桃人。所騎之馬。亦化為茅馬。従者数人。尽為蒲人。梁氏惶懼。捨宅為寺。

死んだはずの夫が馬に乗って数人の従者とともに帰って来るといふ怪異が発生し、正体はそれぞれ桃の木でできた人形、茅でできた馬、蒲でできた人形であつた。このように、「精怪」譚において偶像が仮の姿で現れる時、女の形を模した偶像は女の姿となって現れるし、馬の形を模した偶像は馬の姿となって現れるのである。偶像という、「何かしら」をかたどって作られた器物が、その

「何かしら」そのものに化けて現れているという点が、「偶像変化」譚の特徴であり、偶像以外の器物を正体とする「変化」譚との違いである。

偶像の怪のもうひとつの描かれ方として、動かないはずの偶像がそのまま動いたり話したりする怪異を「偶像動作」とした。例えば【十六】「蘇丕女」は次のような内容となっている。

(原文)

武功蘇丕。天室中為楚丘令。女適李氏。李氏素寵婢。因与丕女情好不篤。其婢求術者行魘蠱之法。以符埋李氏宅糞土中。又縛綵婦人人形七枚。長尺余。藏於東牆窟內。而泥飾之。人不知也。數歲。李氏及婢。相繼死亡。女寡居四五年。魘蠱術成。綵婦人出遊宅內。蘇氏因爾疾發悶絕。李婢已死。莫知所由。經一載。累求術士。禁呪備至。而不能制。後伺其復出。乃率數十人掩捉。得一枚。視其眉目形体悉具。在人手中。恒動不止。以刀斫之。血流于地。遂積柴焚之。其徒皆來焚所号叫。或在空中。或在地上。燒畢。宅中作炙人氣。翌日。皆白衣号哭。數日不已。其後半歲。累獲六枚。悉焚之。唯一枚得而復逸。逐之。忽乃入糞土中。蘇氏率百余人掘糞。深七八尺。得桃符。符上朱書字。宛然可識。云。李氏婢魘蘇氏家女。作人七枚。有東壁上土龕中。其後九年当成。遂依破壁。又得一枚。丕女自爾無恙。

絹の人形が術の力によって動き出し人を襲うという怪異が描かれる。最初から偶像を主語として怪異が語られるため、他の怪異種別のように「正体判明」の概念を規定することが難しい。

先に述べた「偶像変化」は変化前の姿と変化後の姿の差異が比較的小さいため、このような偶像が動作するだけの怪異との境界が曖昧になりがちである。偶像が動作

しているように語られるいくつかの説話（「偶像動作」3話）が、偶像が変化して現れているように語られる多数の説話（「偶像変化」15話）の中にとけ込んだ状態で収録されているという事実から、『太平広記』の編者がこれらの違いをさほど意識していなかった可能性は高い。その一方で偶像以外の器物に関しては、器物がそのままの姿で動作するような怪異は「精怪」項に全く収録されていない。第3章で強調する区別であるが、「器物の姿で現れる怪異」と「器物を原因とする怪異」とが、偶像以外においては、『太平広記』でも区別されていたらしいことが見て取れる。

ここまで見てきた怪異種別のうち「変化」「夢」「偶像変化」は、何かしらが仮の姿となって現れるという怪異であり、表2によると『太平広記』の「精怪」譚の話中実に6話（約80%）がこれに該当している。姿を変えるという要素が「精怪」譚にとつていかに重要な要素であったかをこの数字から伺うことができる。

(2) 怪異の正体について

怪異の正体が判明するという物語要素は「精怪」譚に不可欠なものであり、ほぼ全ての「精怪」譚において怪異には具体的な正体の存在が意識されている。このことは、『太平広記』の編者が「精怪」の下位に設定した小分類「雑器用」「偶像」「凶器」等からも明らかである。「雑器用」とは雑多な道具類のことを指し、「凶器」とは葬礼に関わる道具類のことを指す。これらの小分類は、怪異の正体が何であるかということを基準としてなされている。

「雑器用」は表1によれば「精怪」譚の8話中3話（約38%）を占めていて、定義が広いぶん多様な道具類目を有する小分類である。

「偶像」は「雑器用 偶像附」という形で「雑器用」のおまけのような扱いになっていて、計5話がこれに該当すると考えられる。怪異種別としては「偶像変化」にあたるものが4話、「病気」にあたるものが1話ある。正体はどれも人形の人形や塑像で、材質は陶器や絹や木とされている。5例中4例が女をかたどった偶像であることは特筆に値するかもしれない。中国の人形の怪について井波律子『中国幻想ものがたり』（2000年、大修館書店、pp. 219-221）は紀昀（1724-1805）の書いたもの以外ほとんど見当たらないと述べ、【十一】「盧贊善」の怪異の正体を瓷（かめ）に描かれた絵として訳している。一方、前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』（1959年、平凡社、p. 321）は、同じものを陶器の人形として訳している。原文を以下に示す。

（原文）

盧贊善家。有一瓷新婦子。經數載。其妻戲謂曰。与君為妾。盧因爾惘惘。恒見一婦人。臥於帳中。積久。意是瓷人為祟。送往寺中供養。有童人。晝於殿中掃地。見一婦人。問其由来。云是盧贊善妾。為大婦所妬。送來在此。其後見盧家人至。因言見妾事。贊善窮覈本末。所見服色。是瓷人。遂命擊碎。心頭有血。大如鷄子。

このように、怪異の正体は原文では「瓷人」とされていて、絵であるとも人形であるとも明記はされていない。しかし人形の怪異譚を集めた小分類「偶像」に収録されている以上、少なくとも『太平広記』編者の解釈としてはこれは陶器でできた人形であったのではないだろうか。そして、人形の怪は次の「凶器」も合わせると約5話が『太平広記』に収められていることになり、決して数少ないものではない。

葬礼に用いる不吉な道具類を意味する「凶器」に分類

された説話は10話ある。【三十八】「梁氏」で怪異の正体として語られる茅製の馬や蒲製の人形は、入矢義高訳注『洛陽伽藍記』（1990年、平凡社、p. 201）の注釈によると、葬式の時に用いるもので、墓地までかついで行ってそこで焼くらしい。

10話中7話の怪異の正体は「明器」すなわち副葬品（日本でいうところの埴輪のようなもの）で、定義上は必ずしも人や動物をかたどった偶像であるとは限らないが、例えば【四十六（2）】「張不疑」では以下のような表現がされている。

（原文）

一説。張不疑常与道士共奔往来。道士将他適。乃誠不疑曰。君有重厄。不宜居太夫人膝下。又不可進買婢僕之輩。某去矣。幸勉之。不疑即啓母盧氏。盧氏素奉道。常日亦多在別所求靜。因持寺院以居。不疑且問省。数月。有牙僧言。有崔氏孀婦甚貧。有妓女四人。皆粥之。今有一婢曰金釭。有姿首。最其所惜者。今貧不得已。将欲貨之。不疑喜。遂令召至。即酬其值十五万而獲焉。寵侍無比。金釭美言笑。明利輕便。事不疑。皆先意而知。不疑愈惑之。無幾。道士詣門。及見不疑。言色慘沮。吁嘆不已。不疑詰之。道士曰。噫。禍已成。無奈何矣。非独於君。太夫人亦不免矣。不疑驚惶。起曰。別後皆如師教。尊長寓居仏寺。某守道殊不敢怠。不知何以致禍。且如之何。哀祈備至。道士曰。皆無計矣。但為君弁明之。因詰其別後有所進者。不疑曰。家少人力。昨唯買二婢耳。道士曰。可見乎。不疑即召之。金釭不肯出。不疑連促之。終不出。不疑自詬之。即至。道士曰。即是矣。金釭大罵曰。婢有過。鞭撻之可也。不要。粥之可也。一百五十尚存。何所憂乎。何物道士。預人家事耶。道士曰。惜之乎。不疑曰此事唯尊師命。敢不聽德。道士即以拄杖擊其頭。杳然有声。如擊木。遂倒。乃一盟器女子也。背書其名。道士命掘之。

五六尺得古臺。柩傍有盟器四五。制作悉類所焚者。一百五十千。在柩前儼然。即不疑買婢之資也。復之。不疑愉快瘳疾。累月而卒。親盧氏。旬日繼歿焉。

このように明器の女子であると分かりやすく示されているものもあれば、【四十六(一)】「張不疑」のように、明器の「背」に名前が書いてあったという記述からそれが人型であろうと推測できるものもある。形態を特筆しなくても、当時の共通理解として明器といえば偶像であることが一般的だったのかもしれない。材質は木製がほとんどで、【四十四】「商郷人」のみ金銀となっている。

「凶器」のうち残りの【四十】「竇不疑」と【四十一】「桓彦範」では「方相」が正体とされている。【四十二】「桓彦範」は以下のような話である。

(原文)

扶陽王桓彦範。少放誕。有大節。不飾細行。常与諸客遊俠。飲於荒沢中。日暮。諸客罷散。範与数人大醉。遂臥沢中。二更後。忽有一物。長丈余。大十围。手持矛戟。瞋目大喚。直来趨範等。衆皆俯伏不動。範有胆力。乃奮起叫呼。張拳而前。其物乃返走。遇一大柳樹。範手断一枝。持以擊之。其声策策。如中虚物。数下。乃匍匐而走。範遂之愈急。因入古壙中。泊明就視。乃是一敗方相焉。

このように、単に朽ちた「方相」とだけ記されている。「方相」といえば「方相氏」の略で、「儼」という行事において悪霊や疫鬼を追い払う役割の者であった^③。【四十一】「竇不疑」のほうでは怪異の正体の「方相」を発見する場面で「得一方相。身則編荊也。」という表現がな

されているため、これが荊で編まれた「身」を持つ物体であるということが読み取れる。ここでは方相氏をかたどった偶像の類であると推測してよいだろう。

「火」に分類されている「話」についても考察を試みておこう。【四十九】「范璋」、【五十一】「楊禎」に関しては、怪異の正体が「火」や「灯」になっているもの、おおまかな型としては他の「精怪」譚と相違なく、怪異の正体に即して小分類「火」に収録されたことが分かる。【四十八】「劉希昂」ではそれに加えて「火災の発生」という描写が登場するが、これは【四十九】、【五十一】以外の「火」の説話に共通して見られる特徴である。【五十三】「劉威」は火災の描写があること以外は「雑器用」に相当する内容の説話であるし、【五十二】「盧郁」も火災の描写さえなければ石を原因とする怪異譚であることから、火災の描写を含む説話はその怪異の原因にかかわらず「精怪」の「火」に分類されたのだろうと推測できる。物語内で火災が起こるタイミングも説話によりけりで一定していない。【四十七】「賈耽」と【五十】「胡榮」では怪異の具体的な正体は不明のまま、火災の起こる予兆として描写されているようである。まとめると、「精怪」項の小分類「火」には、「火災の類が姿を変えて現れた怪異譚」と「火災が起こる描写を含む怪異譚」とが収録されていることになる。

「土」に分類されているのは【五十四】「馬希範」のみである。

(原文)

楚王馬希範修長沙城。開濠畢。忽有一物。長十丈余。無頭尾手足。状若土山。自北岸出。游泳水上。久之。入南岸而没。出入俱無蹤跡。或謂之土龍。無幾何而馬氏亡。

③ 三宅和朗『古代国家の神祇と祭祀』1995年、吉川弘文館、pp.229-236

巨大な土山のような怪物が現れたという怪異譚で、これを王の死の予兆とする解釈がされている。怪異の正体は明確にされていないので、怪異じたいの見た目、あるいはこれを「土龍」と言うものもいたという記述からの判断で、「土」に分類されたのだろう。その後、火災や火事に関する「火」の説話と共に、器物や人形の怪異を集めた「精怪」項へと無生物繋がりで加えられたことが推測される。

ここまで見てきた通り、小分類「火」と「土」に関しては、主に怪異の原因へ着目していた「雑器用」「偶像」「凶器」とは異なった基準で説話が集められている。表1から分かるように「火」「土」の計8話が「精怪」項の末尾の部分にまとめられていることから、これらの「精怪」項における一種の例外として扱われていたであろうことは想像できるだろう。「精怪」譚の中で怪異の正体が明らかにならなかったものは、この例外にあたる【四十七】、【五十】、【五十四】の3話であるが、この全てにおいて怪異が災害や死の予兆として描かれているという事実には気を付けておきたい。

ここまで怪異の正体は何であるかという部分に注目してきたが、その正体として記述される器物の状態に関しても言及しておきたい。器物が怪異を起こす理由があえて説明される場合、それが長い時間を経ているということに言及があることが多く、「精怪」譚の中では【五】「劉玄」と【七】「居延部落主」にその例が見受けられる。【五】「劉玄」では、「師曰。此家先代時物。久則為魅。」というように、専門家の台詞として、古いものなので妖怪（魅）になったという説明がなされている。【七】「居延部落主」は以下のような話である。

（原文）

周静帝初。居延部落主勃都骨低。凌暴。奢逸好樂。居

処甚盛。忽有人數十至門。一人先投刺曰。省名部落主成多受。因趨入。骨低問曰。何故省名部落。多受曰。某等数人各殊。名字皆不别造。有姓馬者。姓皮者。姓鹿者。姓熊者。姓麋者。姓衛者。姓班者。然皆名受。唯某師名多受耳。骨低曰。君等悉似伶官。有何所解。多受曰。晓弄椀珠。性不愛俗。言皆经義。骨低大喜曰。目所未睹。有一優即前日。其等肚飢。臘臘怡怡。皮漫遶身三匝。主人食若不充。開口終当不捨。骨低悦。更命加食。一人曰。某請弄大小相成。終始相生。於是長人吞短人。肥人吞瘦人。相吞残兩人。長者又曰。請作終始相生耳。於是吐下一人。吐者又吐一人。通相吐出。人数復足。骨低甚驚。因重賜資遣之。明日又至。戲弄如初。連翻半月。骨低頗煩。不能設食。諸伶皆怒曰。主人当以某等為幻術。請借郎君娘子試之。於是持骨低兒女弟妹甥姪妻妾等。吞之於腹中。腹中皆啼呼請命。骨低惶怖。降階頓首。哀乞親屬。伶者皆笑曰。此無傷不足憂。即吐出之。親屬完全如初。骨低深怒。欲用甕殺之。因令密訪之。見至一古宅基而滅。骨低令掘之。深数尺。於瓦礫下得一大木櫃中有皮袋数千。櫃旁有穀麦。触即為灰。櫃中得竹簡書。文字磨滅。不可識。唯隱隱似有三数字。若是陵字。骨低知是諸袋為怪。欲举出焚之。諸袋因号呼櫃中曰。某等無命。尋合化滅。縁李都尉留水銀在此。故得且存。某等即都尉李少卿般糧袋。屋崩平丘。綿歷歲月。今已有命。見為居延山神收作伶人。伏乞存情於神。不相殘毀。自此不敢復擾高居矣。骨低利其水銀。尽焚諸袋。無不為冤楚声。血流漂洒。焚訖。骨低房廊戶牖。悉為冤痛之音。如焚袋時。月余日不止。其年。骨低举家病死。周歲。無復子遺。水銀後亦失所在。

怪異の正体として発見された皮袋自身の台詞として、元々命が無かったが水銀のおかげで朽ち果てることもなく、長い時を経て今は命を持っていると語られる。「精

怪」譚の中で怪異の正体が古いものであることが読み取れるもの(表3において「経年」の属性を付記したものは20話(約35%)ほど見られ、やはり古いものほど怪異を起こしやすいという感覚の存在は「精怪」譚においても有意に認められる。しかし、逆に新しいものが怪異を起こしたという話も採録されているということには注意が必要であろう。【二十七】「崔穀」である。

(原文)

元和中。博陵崔穀者。自汝鄭来。僑居長安延福里。常一日。讀書牖下。忽見一童。長不尽尺。露髮衣黃。自北垣下。趨至榻前。且謂穀曰。幸寄君硯席。可乎。穀不応。又曰。我尚壯。願備指使。何見拒之深耶。穀又不願。已而上榻。躍然拱立。良久。於袖中出一小幅文書。致穀前。乃詩也。細字如粟。歷然可弁。詩曰。昔荷蒙恬惠。尋遭仲叔投。夫君不指使。何処覓銀鉤。覽訖。笑而謂曰。既願相從。無乃後悔耶。其僮又出一詩。投於几上。詩曰。學問從君有。詩書自我伝。須知王逸少。名価動千年。又曰。吾無逸少之芸。雖得汝。安所用。俄而又投一篇曰。能令音信通千里。解致龍蛇運八行。惆悵江生不相賞。応縁自負好文章。穀戲曰。恨汝非五色者。其僮笑而下榻。遂趨北垣。入一穴中。穀即命僕發其下。得一管文筆。穀因取書。鋒銳如新。用之月余。亦無他怪。

怪異の正体として穴の中から発見された筆記具に対して、その先端が新品のように鋭かった

という感想が書かれている。これをそのまま使用してしまふという展開も独特で、必ずしも古びた器物しか怪異を起こさないと考えられていたわけではないということを示す貴重な資料である。

怪異の正体の状態に関して、経年と並んで顕著な共通項はそれが地中や何かの下から見つかること、つまり「埋

没」したものであることではないかと考えられる。表3によると【二】話(約22%)が埋没したものの起こす怪異譚となっており、経年と並ぶひとつの類型であることは間違いないだろう。ただしこちらにも真逆の例、すなわち人の手に所有され、使用されているような器物が怪異を起こす話がいくつか見られる。最も顕著なものは【六】「游先朝」であろう。

(原文)

広平游先朝。喪其妻。見一人著赤袴摺。知是魅。乃以刀斫之。良久。乃是己常著履也。
現れた妖怪(魅)を刀で斬ってしばらくすると、これは自分がいつも履いている靴であった。経年にしても埋没にしても、あくまでそういうものが多い傾向があるというだけであって、絶対的な条件として認識されていたわけではないということである。中国の器怪感覚の幅の広さが見て取れる。

(3) 怪異の解決について

怪異に対して弓矢や刃物で攻撃を行い、その結果として怪異の正体が判明するという流れは、「精怪」譚に限らず多くの変化譚で見られるものである。表4によると武力によって怪異の解決を図る様子は「精怪」譚にも23例(50%)ほど見られ、そのうち9例が弓矢、5例が刃物による攻撃となっている。例を挙げると【五】「劉玄」は以下のような話である。

(原文)

宋中山劉玄居越城。日暮。忽見一著烏袴褶来取火。面首無七孔。面莽党然。乃請師箠之。師曰。此是家先代時物。久則為魅。殺人。及其未有眼目。可早除之。劉因執縛。刀断数下。乃變為一枕。此乃是祖父時枕也。

遂於鉄臼搗碎而焚之。瘡遂愈。

顔の無い怪物を捕らえて刀で断ち切ると、斬られた怪物は枕へと変わる。怪異に致命傷を負わせることが、正体判明の引き金になっている。

刀や矢で致命傷を与えるパターンとは異なる例として、攻撃行為には次の【十七】「蔣惟岳」に見られるようなものもある。

(原文)

蔣惟岳。不懼鬼神。常独臥窓下。聞外有人声。岳祝云。汝是冤魂。可入相見。若是閑鬼。無宜相驚。於是率然排戸。而欲昇其牀。見岳不懼。旋立壁下。有七人焉。問其所為。立而不对。岳以枕擊之。皆走出戸。因走趁。

没於庭中。明日掘之。得破車輻七枚。其怪遂絶。又其兄常患重疾。岳親自看視。夜深。又見三婦人鬼。至兄牀前。叱退之。三遍。鬼悉倒地。久之走出。其兄遂愈。

この例では、怪異を枕で攻撃し、逃げ出した怪異を追跡することで、その正体の所在を特定している。必ずしも怪異を完全に滅ぼさなくても、攻撃行為は正体判明のきっかけとして機能していることが分かる。

怪異を起こしているものの正体が判明した後に、その正体に対して何らかの \wedge 処置 \sphericalangle を加えることによって解決を図る描写は、表4によると24例(約44%)ほど見られる。そのうち、焼くものは19例、破壊するものは10例となっている(重複あり)。具体例として【十二】「柳崇」を見てみよう。

(原文)

越州兵曹柳崇。忽瘍生於頭。呻吟不可忍。於是召術士夜觀之。云。有一婦女綠裙。問之不応。在君窓下。急除之。崇訪窓下。止見一瓷妓女。極端正。綠瓷為飾。

頭に出来たできもの(怪異種別「病氣」にあたる)の原因が陶器で出来た遊女の人形であったと判明すると、それを鉄臼で搗いて碎き、さらに焼いてしまうことで、ついに病氣は治癒する。原因を根本から消滅させることによって、怪異を発生できなくさせるというイメージの存在が読み取れる。

面白いのは、「精怪」譚において \wedge 攻撃 \sphericalangle または \wedge 処置 \sphericalangle のモチーフが語られるとき、ひとつの説話につき片方しか登場しない場合が多いということである。表4によると \wedge 攻撃 \sphericalangle と \wedge 処置 \sphericalangle が両方登場するものは6話(約11%)であるのに対し、 \wedge 攻撃 \sphericalangle のみが描写されるものは11話(約20%)、 \wedge 処置 \sphericalangle のみが描写されるものは18話(約33%)となっている。つまり、怪異そのものかその正体かのどちらかに対策を行えばそれだけで十分だという感覚で、物語が構成されていったのだろうと推測できる。一方で、そのどちらも登場しないものが14話(約25%)存在していることから、やはり「精怪」譚における描写の中心はあくまで怪異の正体の判明であって、怪異を解決するための行動の描写は副次的なものであったのではないかと思われる。

(4) 「精怪」譚の構造

ここまでに見てきたように、「精怪」譚のほとんどは、まず何らかの怪異が発生してから後にその正体が判明するという「発生」→「判明」の構成をとっている。怪異が発生しないことには怪異譚にならないので「発生」の場面があるのは当然として、単に怪しい人物や怪物が現れるだけでその正体は分からずじまいというような説話は「精怪」譚の中にはほぼ見られなかった(例外は「火」「土」に含まれる3話である)。怪異の正体が明らかになると

いう場面の存在が「精怪」譚の肝となっているのである。逆に、最初から原因となる器物などが主体となって怪異を起こす様子を描写するような、いわば「判明」↓「発生」と表現できる「精怪」譚は見られず（「偶像動作」を除く）、あくまでも怪異発生時点ではその原因は謎とされるのが普通である。「発生」↓「判明」というある種の伝統的構造を有した上で、怪異の正体として記された具体的事物が「雑器用」「偶像」「凶器」「火」にあたる場合、その説話は「精怪」の枠に入るものとして認識されることになる。この考え方によって、「精怪」譚の8割5分は説明できる。

例外として、物語中に火災の描写を含むものは、話型や正体にかかわらず「精怪」の枠に入れられている。また、偶像が動作する怪異譚については、怪異の正体が偶像である怪異譚と同一視されているようである。

第3節 『搜神記』の器怪譚…「精怪」の枠から外れる器怪譚について

第1章で『太平広記』とともに例示した『搜神記』について、これに収録された器物にまつわる説話を眺めていくことを通じて、『太平広記』の「精怪」の枠からはみ出るような種類の器怪説話の存在について論じたい。『搜神記』の原文としては長澤規矩也解題『和刻本漢籍隨筆集 第十三集』（1974年、古典研究会）を参照した。まず、『搜神記』巻18冒頭に、怪音声の正体が枕と杓文字だったという話があるが、これは『太平広記』の「精怪」項の先頭に【一】「陽城縣吏」として引用されている。ちなみに『太平広記』の「精怪」譚に用いられている出典の中で最も古いものがこの『搜神記』となっている。

(1) 宝の怪異

『搜神記』巻8の二番目の話は、細腰と呼ばれる杵の

怪の話である。

(原文)

魏郡張奮者家本巨富忽衰老財散遂売宅与程応入居
挙家病疾転売隣人阿文文先独持大刀暮入北堂中梁上
至三更竟忽有一人長丈余高冠黄衣升堂呼曰細腰細腰
応啞曰舍中何以有生人氣也答曰無之便去須臾有一高
冠青衣者次之又有高冠白衣者問答並如前及将曙文乃
下堂中如向法呼之問曰黄衣者為誰曰金也在堂西壁下
青衣者為誰曰錢也有堂前井辺五歩白衣者為誰曰銀也
有牆東北角柱下汝復為誰曰我杵也今在竈下及暁文按
次掘之得金銀五百斤錢千万貫仍取杵焚之由此大富宅
遂清寧

(要約)

住む者が病気になるという家に、高い冠をかぶった黄色い衣の者が訪問してきて、「細腰、細腰」と呼ぶと、それに応える細腰の音がする。同様に青い衣の者、白い衣の者が訪問してくる。主人公の何文（今回参照した和刻本では「阿文」となっている）はそれを真似して細腰と問答を行い、黄色い衣の者は壁の下にある金、青い衣の者は井戸の辺りにある錢、白い衣の者は柱の下にある銀、細腰は竈の下にある杵であるという情報を聞き出す。明け方になってから、何文は金、銀、錢を掘り出し、杵は燃やしてしまう。それから裕福になり、家にも何事も起こらなくなった。

こちらも『太平広記』に「何文」という題で収録されているのだが、「精怪」ではなく「宝」の項に分類されていることに注意したい。「病氣」や「音声」（この物語において細腰は声だけの怪異である）の怪異があつて、その正体が「埋没」していた杵であると判明し、これを「焼く」ことで解決するという流れだけ見れば、この説

話は【一】「陽城縣吏」と並んで「精怪」に分類されたとしても全くおかしくなかったはずのものである。実際、これらの話は『搜神記』卷18においては連続した位置に収録されていた。しかし、『太平広記』の編者が注目したのは、黄、青、白の衣を着て現れた「変化」のほうであったようだ。彼らの正体は「埋没」した金、銭、銀であつて、最終的に発見者のものになる。主人公が財宝を得るといふ筋のほうに優先され、この話は「宝」の項に収録されることとなったのだろう。金や銀でできた道具が怪異を起こす話は「精怪」譚の【二十二】「岑順」や【四十四】「商郷人」にも見られるので、金銀という材質よりも、それが道具や明器であるか、純粹な貨幣であるかという用途の部分に着目した区分であるようだ。

(2) 器物の異常な動作

器物にまつわる別種の怪異譚として、『搜神記』卷7から以下の二つの説話を取り上げる。

(原文)

元康太安之間江淮之域有敗屨自聚於道多者至四五十量人或散去之投林草中明日視之悉復如故或云見狸銜而聚之世之所説屨者人之賤服而当勞辱下民之象也敗者疲弊之象也道者地里四方所以交遍王命所由往来也今敗屨聚於道者象下民疲病將相聚為乱絶四方而壅王命也

(要約)

朽ちた草履がひとりでに道に集まる。多い時は四五十もの数になる。草むらに投げ捨てたりしても、翌日にはまた元に戻っている。動物がくわえて集めているのを見たという者もいた。世の人の説くところでは、草履は身分の低い者を表しており、それが朽ちているのは疲弊していることを表している。いま朽ちた草履

が道に集まったのは、疲弊した下民が集まって乱を起こし、王の命令が通る道を塞ごうとしていることを表しているとのことであった。

(原文)

晋惠帝永興元年成都王之攻長沙也反軍於鄴内外陳兵是夜戟鋒皆有火光遙望如懸燭就視則亡焉其後終以敗亡

(要約)

成都王が町の内外に兵を置いたところ、その夜、矛の先がみな火の光を発し、遠くから見ると灯りを掲げたようであった。近づいて見ると消えてしまった。その後ついに成都王は敗れて殺された。

まず後者の矛の話から見ると、光らないはずの器物が光るといふ怪異が発生し、それを見た人物がその後の戦で死ぬという流れとなっている。怪異が、直接は関係のない事件や災害の「予兆」として解釈され語られる例は少なからず見られるものであるが、この矛の話もその一つであると言えよう。前者の草履の話のほうは典型から少々離れた語り口になっている。自分では動かないはずの草履がひとりでに道に集まってくるという怪異が発生し、それを世間の人びとが戦乱の予兆として解釈した、という所で終わっており、実際に乱が起こったのかどうかまでは語られていない。

ここで理解の助けとする為に、中国における類似の怪異譚を、前野直彬訳『六朝・唐・宋小説選』(1968年、平凡社)から三つ紹介する。

(要約)

宮中の宝蔵で火事が起こり、三つの宝物が焼けてしまった。混乱が起こらないよう軍隊が警備していたが、

宝物の一つであった剣がみな目の前で宝蔵の屋根を突き抜いて飛び去り、行方知れずとなった。

(要約)

王愉が庭を歩いていると、帽子が勝手に脱げて空中に浮かんだ。また、霊前にお供えをしていると、机の上の酒器が転がり落ち、また上へ這い上がってきた。そのうち、息子が謀反を起こして殺された。

(要約)

張仲舒の庭先に赤い薄絹が何枚も降ってきた。薄絹にはそれと同じくらいの寸法の紙が結びつけてあった。不快に思っただけで焼き捨てたが、何枚かは残って、人々の手に渡った。二日後、張仲舒は急病で死んだ。

これら三話はいずれも、中国で宋の時代に編まれた『異苑』が典故とされている。剣の話は動かないはずの器物が飛び去っていったという怪異の描写のみで話が終わっている。帽子と酒器の話も怪異としては器物が重力に反して勝手に動くというもので、それが凶兆として処理されることで説話が形成されている。薄絹の話も空から降ってくるはずのない器物が降ってくるという怪異の後に、その家の者が急死するという構造である。

いま『搜神記』と『異苑』から紹介した5つの話は、いずれも『太平広記』の「精怪」項には収録されていないものである。他の項目に収録されているかどうかまでは確定することができなかった^④。これらの説話では器物がどこからともなく現れたり、浮遊や発光といった本来起こりえない挙動をするという怪異を語ることが主眼となっていて、その解決や説明には関心が寄せられてい

④ 「王愉」の話と「張仲舒」の話が『太平広記』の「妖怪」項に収録されていることは判明した。「妖怪」項の詳細については更なる調査が求められる。

ない。末尾に関係者の死などの凶事が語られることが多いが、怪異そのものが凶事の原因となっている訳ではなく、あくまでも予兆としてのみ認識されている。『太平広記』の「精怪」項では、第2章第2節(2)で触れた例外であるところの【四十七】「賈耽」、【五十】「胡栄」、【五十四】「馬希範」が、正体不明の怪異を凶事と結びつけて語るといって同類の説話であるといえるだろう。物語の最後で人が死ぬ話として【七】「居延部落主」や【四十六】「張不疑」があるが、こちらは怪異そのものに起因する死であることが読み取れるので、また違った結びだといえそうである。【二】「桓玄」は怪異が凶事を遠回しかつ具体的に予言しているという点で『搜神記』の草履の話と近いものがある。

第3章 日本の器怪譚を読む…『今昔物語集』と『化物草紙』

本章では、室町以前の日本で語られた器物にまつわる怪異譚を7つ取り上げ、中国の「精怪」譚を指標にしなから分析していく。「精怪」譚と同系統の「器物を原因とする怪異」と、別系統の「器物の姿で現れる怪異」との二つに分けて論を進め、その後それらを俯瞰した上で日本の器怪譚全体の特徴を導き出す。最後に付け加えて、器怪の図としての表現に関する論を述べる。

第1節 器物を原因とする怪異

(1) 提の話…『今昔物語集』巻2における「精(たま)」概念

(原文)

今は昔、東三条殿に式部卿宮と申しける人の住み給ひける時に、南の山に長三尺許なる五位の太りたるが、時々行きけるを、御子見給ひて、怪しび給ひけるに、

五位の行く事既に度々に成りにければ、止事無き陰陽師を召して、其の祟を問はれければ、陰陽師、「此れは物の気なり。但し、人の為に害を成すべき者には非ず」と占ひ申しければ、「其の靈は何こに有るぞ。亦何の精の者にて有るぞ」と問はれければ、陰陽師、「此れは銅の器の精なり。宮の辰巳の角に土の中に有り」と占ひ申したりければ、陰陽師の申すに随ひて、其の辰巳の方の地を破りて、亦占はせけるに、占に当りたる所の地を二三尺許掘りて求むるに、無し。陰陽師、「尚掘るべきなり。更に此こは離れじ」と占ひ申しければ、五六寸許掘る程に、五斗納許なる銅の提を掘り出でたり。其の後よりなむ、此の五位行く事絶えにけり。然れば、其の銅の提の人に成り、行きけるにこそは有らめ。糸惜しき事なり。

此れを思ふに、物の精は、此く人に成りて現ざるなりけりとなむ、皆人知りにけりとなむ、語り伝へたるとや。

『今昔物語集』の提の話、「東三条の銅の精、人の形と成りて掘り出ださるる語(こと)」を、前章の「精怪」譚と同様の方針で分析してみよう。「五位が現れる」という怪異(変化)が発生し、専門家の占いに従って掘り出した結果、その正体は土中の銅の提(金属・埋没)であったと判明する。判明した時点で怪異が止むため特別な処置は行われず、話型としては「発生」→「判明」となる。怪異の正体が具体的な器物だと判明するところに重きをおく構造といい、怪異が異様な人間の姿で現れたり正体が土中から発見されるような描写といい、『太平広記』における典型的な「精怪」譚とかなり近い語り口の説話であるといえよう。

細かい描写でいえば、怪異の姿が五位という位階のものであったり、怪異解決の専門家が陰陽師であったりするとところに、中国と日本の社会構造の違いが表れている。

その他に『太平広記』の「精怪」譚と比較して独特な点は、器物の材質が銅であるということであろう。「精怪」譚における怪異の正体で金属名が特記されている場合、それは「鉄」あるいは「金」や「銀」であって、銅製であると記述されたものは見当たらなかった。

この説話には「精(たま)」 「物の精」という呼称が登場する。これらの語彙については、精霊や靈魂の意と捉えるのが通例である。いまの日本語で精霊や靈魂といえば化物とはまた異なる概念で、なにかしらに宿る靈的あるいは精神的な存在を指してそう呼んでいる。つまり、この提の話は器物に宿る魂のようなものに言及した話として解釈されているわけであるが、ここで着目すべきは、そのような器物に宿る「霊」や「魂」にあたる概念が中国の「精怪」譚の中に全く登場してこなかったことだ。

器物に宿るものでいうと、【七】の「居延部落主」の話で皮袋に「命」が宿ったとする記述の存在が挙げられるが、これはいま議論している日本語の「精」とはニュアンスが異なるだろう。また、【五十一】の「楊禎」という話には「魂気」と「形魄」の概念が登場しているが、これは「鬼」(中国語の「鬼」は日本語でいうところの幽霊)に関する文脈なので、人間の魂魄に言及したものである。無生物であるところの器物の靈魂に言及する話は少なくとも『太平広記』の「精怪」譚の中には見られない。この観測結果から考えられる問題は、『今昔物語集』の「精」「物の精」といった表現が、本当に現代人のイメージするような精霊的なものを表しているのか、あるいは中国の「精怪」譚に現れる「精怪」「精物」と同様、ものの変化(へんげ)したものを指していたのではないだろうか、というものである。もし本当に靈魂的なものの存在を意識していたのであれば、それは中国の数多くの「精怪」譚の中に見られなかった、日本的な器物観の表れとして考えることができるかもしれないし、

そうでなければ、この説話ならびに日本の器物観に対するこれまでの理解が間違っていたことになる。

『今昔物語集』巻二十七の中で「精」という言葉が使われている説話は二つあり、ひとつはこの提の話、もうひとつは「水の精」が翁の姿で現れる話である。題名は「冷泉院の水の精」、人の形と成りて捕らへらるる語となっている。

(原文)

今は昔、陽成院の御しましける所は、二条よりは北、西洞院よりは西、大炊御門よりは南、油小路よりは東、二町になむ住ませ給ひけるに、院の御しまさで後には、其の冷泉院小路をば開きて、北の町は人家共に成りて、南の町にぞ池など少し残りて有りける。

其れにも人の住みける時に、夏の比、西の台の延に人の寝たりけるを、長三尺許有る翁の来て、寝たる人の顔を捜りければ、怪しと思ひけれども、怖しくて、何にも否為らずして、虚寝をして臥したりければ、翁和ら立返りて行くを、星月夜に見遣りければ、池の汀に行きて、掻消つ様に失せにけり。池掃ふ世も無ければ、萍、昌蒲生ひ繁りて、糸六借氣にて、怖し気なり。

然れば、弥よ池に住む者にや有らむと怖しく思ひけるに、其の後夜々来たりつつ捜りければ、此れを聞く人皆恐ぢ合ひたる程に、兵立ちたる者有りて、「いで己れ、其の顔捜らむ者必ず捕らへむ」と云ひて、其の延に只独り芋縄を具して、臥して終夜ら待ちけるに、宵の程見えざりけり。夜半は過ぎやしぬらんと思ふ程に、待ちかねて、少し□たりけるに、面に物の水やかに当りければ、心懸けて待つ事なれば、寝心にも急と思えて、驚くままに起き上りて捕へつ。芋縄を以て只縛りに縛りて、高欄に結び付けつ。

然て人に告ぐれば、人集りて火を燈して見ければ、長三尺許なる小翁の浅黄の上下着たるが、死ぬべき気

はひなる、縛り付けられて、目を叩きて有り。人物問へども答へも為す。暫し許有りて、少し咲みて、此彼見廻らして、細く侘し気なる音にて云はく、「鹽に水を入れて得させむや」と。然れば、大きな鹽に水を入れて前に置きたれば、翁頭を延べて鹽に向ひて、水影を見て、「我れは水の精ぞ」と云ひて、水につふりと落ち入りぬれば、翁は見えず成りぬ。然れば鹽に水多く成りて、鉞より泛る。縛りたる縄は結ばれながら水に有り、翁は水に成りて解けにければ、失せぬ。人皆此れを見て、驚き奇しびけり。其の鹽の水をば泛さずして、掻きて、池に入れにけり。其れより後、翁来て人を捜る事無かりけり。

此れは水の精の人に成りて有りけるとぞ、人云ひけるとなむ、語り伝へたるとや。

小さい翁が「我れは水の精ぞ」と宣言して鹽の水の中に溶けてしまう場面が描かれているが、ここで寧にも翁が溶け込んだことにより水かさが増して鹽から水が溢れるという描写がなされている。つまり、この翁の正体は実体のある水そのものであると認識されていて、実体のない精霊的なものとは異なるということが分かるのである。となるとやはり、翁が自称した「水の精」という表現は、水に宿る霊的なものというよりも、水そのものが変化したものを指していると考えの方が理にかなっているのではないだろうか。だとすれば、提の「精」も同様に、提じたいが変化して現れたものを指しているに過ぎないと考えることができそうである。

「精」「物の精」と似た表現に、「霊」「物の霊」というものがある。『今昔物語集』巻二十七「本朝付霊鬼」には、「霊(りょう)」「者の霊」「物の霊」という表現が頻出するが、この言葉は人間に宿っている霊魂的なものではなく、人間が死んだ後になつたもの(主に、幽霊のようなもの)を指している。あるいは、怪異的存在

を漠然と指して「霊」と呼んでいる例も見られる。提の話の中にある「其の霊は何こに有るぞ」という台詞に關しても、歩く五位という怪異に対して、その原因となっている存在を漠然と指して用いられていると考えられるので、現代人のイメージする霊魂的なものを指しているわけではないだろう。

したがって、『今昔物語集』の提の話における「精」「物の精」という表現は、ものに宿る精霊や霊魂に言及しているわけではなく、『太平広記』の「精怪」「精物」と同様に無生物が姿を変えて現れたものを指している、という仮説が立てられる。器物の持つ霊魂というような発想が本場に当時、器物の妖怪にまつわる文脈の中に存在していたのかということは、慎重に吟味されるべき問題である。

(2) 杓子の話

(原文)

九条わたりにあれたる家にかすかにてすむ女ありけり人のもとよりかち栗をおこせたりけるをくひみたるにむかひたるすひつのあるよりしろ／＼としたる手をさし出してこふやうにしけれはいとふしきなれとも手のいたけしたるほどにさまておそろしき心地もせてひとつとらせたりけれハひきいれて又さしいたし／＼こひけれハたひことに一つとらせて四五とたひして後ハ見えさりけりふしきにおほえてつとめてその下をみせければしやくしといふ物のしろくちいさきそおちはさまりてありけるとらせし栗もさなからそはにありけるとふしきなりけり

『化物草紙』の杓子の話で発生する怪異は「白い手が現れて栗を欲しがる」というもので、怪異の現れた場所を翌朝に搜索することで、白く小さい杓子(埋没)を発

見する。怪異の正体が杓子だったと断言されているわけではないものの、白くて可愛らしいという雰囲気的一致と、手に与えた栗がそのまま落ちていたという描写から、現れた手と見つかった杓子が同一のものであること、すなわち杓子が手の姿に「変化」して現れていたということが表現されている。提の話と同じく、まず怪異が発生してから最終的にその正体が器物であったと判明する話型であって、「精怪」譚と同系統の説話であるといえる。変化後の姿が「手」という身体の一部であるような例は『太平広記』の「精怪」譚の中でも珍しく、【二十六】「姚司馬」のみである。「姚司馬」における手の姿の怪異は、同説話中で複数起こる怪異現象のうちのひとつで、二つの小さな手が灯りの下に現れて銭を乞うものとして描写されている。しかし説話全体として見ると、「手がものを乞う」イメージ以外、『化物草紙』の杓子の話とは似ても似つかぬ内容となっている。

この説話内で怪異に対して記された感想が、不思議であるが可愛らしく、恐ろしくはないというものであることは特筆に値する。室町後期における、妖怪変化に対する目線の一例である。

(3) 銚子の話…怪異を起こした器物の処理について

(原文)

これも女とちすミけるにみな人しつまりてたゞひとり念仏申してゐたりけるにたしたなのあるりけるや戸のあきたるより耳たかき法師のかしらをすこし出してのそきてひき入れ／＼たひ／＼しけれはいとおそろしくてぬす人などかのかゝまりゐてねるを待かなとせむかたなくておとこまねかたのよろほいゐたるかひとりありけるをおこして見せければ人もなし又程なき所なればひとなどの出へきやうもなければ

心えずおほえてあげにけり又の夜たゝ同様に見えた法師のそきければ反々ふしきにてつとめてよく／＼みれはいつの世にかふりくさりたる銚子のえもおれたるそありけるこれかはけゝるにそとてすててゝ後へのそくものもなかりけり

『化物草紙』の銚子の話では、怪異は「耳の長い法師」の姿で現れる。翌朝によく見ると、いつの時代のものかと思うようなぼろぼろの銚子（経年・破損）が見つかる。これが化けたのだらうと判断して、捨ててしまうとその後怪異は途絶える。怪異が現れ、それが道具の変化であったと判明する、典型的「精怪」譚の構造を有する説話である。

『化物草紙』の銚子の話は、今回いくつか取り上げた室町以前の日本の器怪譚の中では唯一、話型の中にへ処置への要素が入っているものである。『太平広記』の「精怪」譚において怪異の原因であると判明した器物を燃やしたり壊したりする行為は、表4によると約50%の説話に見受けられるような典型的描写であった。

この銚子の話で語られるへ処置の方法は、単に「捨ててしまう」ことである。中国の「精怪」譚のほうでは、念入りに焼却ないし破壊する例が多く、なんとなく「捨てて」で済ませるような描写は見受けられなかった。最も近いものでいうと【三十五】「姚康成」における、傷つけずに他の場所に埋めるというものであるか。「埋める」というのはものを人間の生活領域から排除する行為であって、「捨てる」という概念を具体的に遂行するための手段のひとつとしても一般的なものである。わざわざ「傷つけずに」と述べられているのは、他の説話において一般的には器物を傷つける方向性のへ処置行為が行われていることをおそらく話者あるいは編者が知っているからであって、そうしないことが特殊なことである

という意識がここから読み取れる。「精怪」譚において「埋没」したものが怪異を引き起こす説話が多いことを考えると、単に「埋める」という行為を怪異に対するへ処置として採用することはあまり当時の一般的感覚にそぐわなかったのではないかということは想像に難くないし、埋めるという処置行為の実例の少なさもそれを物語っている。怪異を引き起こす器物を焼却・破壊するという行動からは、それらを自分の目の届かないところに追いやるだけでは不十分であり、そのもの自体をきちんと消滅させる必要があるという無意識的な感覚の存在を読み取ることができる。少々破損している程度のものならごく普通に化けて出るとされていたことは、「精怪」譚に破損した器物を原因とする怪異が表3を基準として「話ほど見られることからも知ることができる。

『化物草紙』の銚子の話は、話型としてのへ処置の要素を持ちながらも、その描写の根拠となる感覚的側面において『太平広記』の「精怪」譚とは異なっているといえる。法師となって現れたと判明した銚子に対して、例えばそれを野放しにするとまた怪異が起こりかねないというような切迫した感覚の存在は見られず、軽い気持ちで自分の生活領域から排除してしまえばこの一件は終了するのである。あるいは、「捨てる」ということさえ必ずしも必要性に迫られての描写ではなく、形式的なものにすぎなかったかもしれない。

(4) 案山子の話…偶像の起こす怪異

(原文)

これもむかしある山里にひとりすむ女ありけり家のやふれたるをとりなをすものもなしやう／＼秋風も身にしみ心ほそくおほえけるまゝに門田の面にたちいてうちなかめつゝおとろかしにても来てわらわかつまになれかしとそいひけるかくてすき行ほとに

あるゆふくれに門のかたよりもミゑほしきて弓矢も
ちたるものやとからむといへハやとしつとかくいひ
よりてその夜はかたらひあかしぬかくて夜かれなく
かよひけるかある暁おき別るとてへう／＼としてた
てれば空行鳥もめなれぬ我身の様もあらはれぬべし
といひけり

いつくをとまりとしもおほえぬけしきも心得られず
またこのひとりこともあやくおほえてなかきいと
をつけて帰をりにつなきてみればそろ／＼とあゆミ
あゆミてとまりたる所をミレハ田中にあるおとろか
しといふ物にてそありける反々おそろしくあさまし
くあほえけりはけあらはれぬとや思ひけんその後は
見えさりけるとなむ

『化物草紙』の案山子（おどろかし）の話では、揉鳥
帽子を被って弓矢を持った者が現れ、女の家泊まる。
この者に糸を結び付けて追跡したところ、案山子が化け
ていたことが判明したのであった。人間の姿で現れた変
化の正体が、人間をかたどった偶像であったという内容
から、『太平広記』『精怪』項の小分類「偶像」に相当
する説話であると言える。男に付けた糸を辿ることぞ
の正体に迫るという描写において、この説話が三輪山伝
説を元としているであろうことはすでに澁澤龍彦「付喪
神」（『文芸』15巻2号、1979年2月、河出書房）で指
摘されている。

平安時代初期の『日本霊異記』には、仏像に関わる怪
異譚（霊験譚）が複数見受けられる。

仏像というはある種の偶像ではあるのだが、分析の上
では「偶像」とは別の「神像・仏像」の怪異として考え
るべきものである。神仏をかたどった偶像とそれ以外
の偶像とは、器物としての背景があまりにも異なっ
ている。これらが器怪に関する先行研究に引かれていない
ということもあり、神像・仏像の怪異は本論文では分析

の対象外としている。

第2節 器物の姿で現れる怪異

(1) 油瓶の話

(原文)

今は昔、小野宮右大臣と申しける人御しけり。御名
をば実資とぞ申しける。身の才微妙く、心賢く御しけ
れば、世の人、賢人の右大臣とぞ名付けたりし。

其の人、内に参りて罷り出づとて、大宮を下に御し
けるに、車の前に少き油瓶の踊りつつ行きければ、
大臣此れを見て、「糸怪しき事かな。此は何者にか有
らむ。此は物の気などにこそ有るめれ」と思ひ給ひて
御しけるに、大宮よりは西、□よりは□に有りける人
の家の、門は閉てられたりけるに、此の油瓶、其の門
の許に踊り至りて、戸は閉てたれば、釜の穴の有るよ
り入らむ入らむと、度々踊り上りけるに、無期に否踊
り上り得て有りける程に、遂に踊り上り付きて、釜の
穴より入りにけり。

大臣は、此く見置きて返り給ひて後に、人を教へて、
「其こ其こに有りつる家に行きて、然る気無くて、其
の家に何事か有ると聞きて返れ」とて遣したりければ、
使行きて即ち返り来て云はく、「彼の家には若き娘の
候ひけるが、日来煩ひて此の昼方既に失せ候ひにけ
り」と云ひければ、大臣、「有りつる油瓶は、然れば
こそ物の気にて有りけるなりけり。其れが釜の穴より
入りぬれば、殺してけるなりけり」とぞ思ひ給ひける。
其れを見給ひけむ大臣も、糸只人には御さざりけり。
然れば、此かる物の気は、様々の物の形と現じて有
るなりけり。此れを思ふに、怨を恨みけるにこそは有
らめ。此くなむ語り伝へたるや。

『今昔物語集』の油瓶の話には、「鬼、油瓶の形と現

じて人を殺す語」という題名が付けられている。題名では「鬼」という言葉が用いられているが、説話中では「鬼」ではなく「物の気」の語が使われている。まず『今昔物語集』編者の認識として、この説話は「鬼」あるいは「物の気」が油瓶の形に「変化」して人を殺した話である、ということが題名から読み取れる。しかし、油瓶の正体ではなく、これはあくまでも登場人物による推測にすぎないということに注意したい。油瓶が跳ねるといって怪異が起り、その後人が死ぬという流れだけ見ると、

これは本論文第2章第3節で述べたような、予兆として器物が動作する中国の怪異譚に近いようにも思えるが、名も無い第三者に不幸が起こるといって、怪異が直接人を殺している点で、予兆系の怪異とも性質を異にする。

ひとまず『今昔物語集』の編者や先行研究の認識にならない、この説話を変化譚として見てみよう。まず、その正体が「鬼」ないし「物の気」であり、それが器物の姿に変化して現れているという時点で、これは『太平広記』の「精怪」譚とは明らかに異なる系統の説話だといえる。

『太平広記』において説話が「精怪」に分類される基準のひとつは、怪異に明確な正体が意識されていて、それが多様な道具類あるいは偶像や明器であることであった。

「鬼」や「物の気」というのは目に見えない漠然とした概念であって、このようなものを正体とする説話は「精怪」譚には見られなかった。さらに、「変化」としての仮の姿に関して、それが油瓶のような器物の姿であるという例も、「精怪」譚には存在しない。したがって、『今昔物語集』の提の話と油瓶の話とを『太平広記』の編者の目線で見るとき、提の話は「精怪」に分類されるものであるのに対して、油瓶の話は決して「精怪」には分類されないものであって、両説話は全くの別系統のものとして認識されるべきであることが分かる。この感覚は『今昔物語集』の編者がこの二話を隣接させずに収録したこ

とからも一応読み取ることができるだろう。

「器物を原因とする怪異」と「器物の姿で現れる怪異」(どちらも「変化」とは限らない)とが同列に語られず、区別して認識されていたということは、器物の妖怪を論じる上での前提として重要である。今の日本で単に「器物の妖怪」と言ったとき、「妖怪」という言葉の多義性が災いしてこれらの区別が曖昧にされがちであるため、ここで強調しておきたい。

「物の気」という語彙は『今昔物語集』巻二において、この油瓶の話に3回と提の話に1回用いられている。阪倉篤義、本田義憲、川端善明校注『新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部三』(1981年、新潮社、p.28)の頭注(提の話で、歩く五位に対する陰陽師の見解としての「物の気」への頭注)では、「一語となった『もの(悪霊)』ではなく、その語源的な意味「物」(存在するもの)の「気」(霊、けはい)であろう。」と解説されている。提の話と油瓶の話という器物に関わる物語でのみこの語が使われていることから、一般的な「物の怪」とは異なるニュアンスでこの「物の気」という言葉が使われていることが想像できる。

油瓶の話に対する『今昔物語集』編者の言葉として、このような「物の気」は様々な物の形で現れるものだ、とされていることから、油瓶の形であらわれた怪異の正体あるいは本質にあたるものを指して「物の気」と呼んでいることが読み取れる。物語中で跳ねる油瓶を見た大臣が、これは「物の気」などのように見える、と考えているのも、油瓶の入って行った家の娘が亡くなったと聞いた大臣が、先ほどの油瓶はやはり「物の気」であった、と考えているのも、油瓶という仮の姿で現れた怪異の本質的な部分へ言及していると考えられる。「物の気」が油瓶の姿を借りて現れている、という認識からして、この「物の気」という語彙は器物としての油瓶じたいが元

来持ち得る要素（たとえば霊魂的なもの）に意識を向け
たものではないと言つてよいだろう。

提の話のほうでは、五位の姿の怪異に対する陰陽師の
見解として、これは「物の氣」であるが人に害をなすよ
うな者ではないと語られている。先に述べたように提の
怪と油瓶の怪はその系統を異にするものであるため、こ
れらの怪異に共通して用いられている「物の氣」の語に
一元的な意味合いを見出すのは難しい。器物に関わる怪
異に対して使われる、多義的なあるいは広い意味を持つ
言葉であつたと考えるのが妥当であろう。

(2) 板の話

(原文)

今は昔、或る人の許に、夏の比、若き侍の兵立ちたる
二人、南面の放出の間に居て、宿直しけるに、此の二
人、本より心ばせ有り、□なりける田舎人共にて、大
刀など持ちて寝ねで物語などして有りけるに、亦其の
家に所得たりける長侍の、諸司の允・五位などにて有
りけるにや、上宿直にて出居に独り寝たりけるが、然
様の□なる方も無かりければ、大刀・刀をも具せざり
けるに、此の放出の間に居たる二人の侍、夜打深更く
る程に、見ければ、東の台の棟の上に、俄かに板の指
し出でたりければ、「彼れは何ぞ。彼こに只今板の指
し出づべき様こそ無けれ。若し人などの、火付けむと
思ひて屋の上に登らむと為るにや。然らば、下よりこ
そ板を立てて登るべきに、此れは上より板の指し出で
たる、心得ぬ事かな」と、二人して忍びやかに云ふ程
に、此の板漸く只指し出でに指し出でて、七八尺許指
し出でぬ。奇異しと見る程に、此の板、俄かにひらひ
らと飛びて、此の二人の侍の居たる方様に來たる。然
れば、「此れは鬼なりけり」と思ひて、二人の侍、大
刀を抜きて、「近く來たらば切らむ」と思ひて、各突

跪きて、大刀を取り直して居たりければ、其こへは否
来ずして、傍なる 子の迫の塵許有りけるより、此の
板こそこそとして入りぬ。

此く入りぬと見る程に、其の内は出居の方なれば、
彼の寝たりつる五位侍、物に圧はれたる人の様に、二
三度許うめきて、亦音も為ざりければ、此の侍共驚き
騒ぎて、走り廻りて、人を起こして、「然々の事なむ
有りつる」と告げければ、其の時人々起きて、火を燃
して寄りて見ければ、其の五位侍をこそ、真平に□殺
して置きたりけり。板、外へ出づとも見えず、亦内に
も見えざりけり。人々皆此れを見て、恐怖ゆるる事限
無し。五位をば即ち掻き出でにけり。

此れを思ふに、此の二人の侍は、大刀を持ちて切ら
むとしければ、否寄らで、内に入りて、刀も持たず緩
みて寝入りたる五位を□殺してけるにこそは有らめ。
其れより後にや、其の家に此かる鬼有りけりとは知り
けむ。亦、本より然る所にて有りけるにや、委しく知
らず。

然れば、男と成りなむ者は、尚、大刀・刀は身に具
すべき物なり。此れに依りて、其の時の人皆此の事を
聞きて、大刀・刀を具しけりとなむ、語り伝へたと
や。

「鬼、板と現じ、人の家に來たりて人を殺す語」とい
う題名の説話であり、「鬼」が板の姿で現れて人間を圧
殺した話とされている。油瓶の話と同様、板の正体が鬼
であるという証拠の存在は描かれておらず、板の正体を
鬼であるとする解釈は登場人物による推測として描かれ
ている。油瓶の話と比較して特筆すべきは、怪異が直接
人間を殺したということがより明確に読み取れる書き方
になっている点と、「物の氣」の語が用いられていない
点である。おそらく、「物の氣」の概念はより広い「鬼」
の概念に包含されるものであつたために、板の話では

「鬼」に言い換えられているのだろう。具体的器物の姿で現れた怪異に対して、漠然とした恐ろしいものが仮の姿としての器物の姿で現れているのだと想定している点は油瓶の話と同じである。

(3) 単衣の話…予兆から殺人へ

『今昔物語集』卷^二には、第1章で紹介した提や油瓶や板の話以外にも、このような話も収録されている。

(原文)

今は昔、冷泉院よりは南、東洞院より東の角は、僧都殿と云ふ極めたる悪しき所なり。然れば、打解けて人住む事無かりけり。

而るに、其の冷泉院よりは只北は、左大弁の宰相源扶義と云ひける人の家なり。其の左大弁の宰相の舅は、讃岐守源是輔と云ひける人なり。其れに、其の家にて見ければ、向の僧都殿の戌亥の角には、大きに高き榎の木有りけり。彼れは誰そ時に成れば、寝殿の前より、赤き単衣の飛びて、彼の戌亥の榎の木の方様に飛びて行きて木の末になむ登りける。

然れば、人此れを見て恐ぢて、当へも寄らざりけるに、彼の讃岐守の家に宿直しける兵なりける男の、此の単の飛び行くを見て、「己れはしも、彼の単衣をば射落してむかし」と云ひければ、此れを聞く者共、「更に否射じ」と諍をして、彼の男を励し云ひければ、男、「必ず射む」と諍ひて、夕暮方に彼の僧都殿に行きて、南面なる簀子に和ら上りて待ち居たりける程に、東の方に竹の少し生ひたりける中より、此の赤単衣例の様にはへ飛びて渡りけるを、男雁膀を弓に番ひて、強く引きて射たりければ、単衣の中を射貫くと思ひけるに、単衣は箭立ちながら、同じ様に榎の木の末に登りにけり。其の箭の当りぬと見る所の土を見れば、血多く泛れたりけり。男は本の讃岐守の家に返りて、諍ひつ

る者共に会ひて、此の由を語りければ、諍ふ者共、極しく恐ぢけり。其の兵は其の夜寝死になむ死にけり。然れば、此の諍ふ者共より始めて、此れを聞く人皆、「益無き態して死にたる者かな」となむ云ひ誇りける。実に人は命に増す物は無きに、由無く猛き心を見えむとて死ぬる、極めて益無き事なりとなむ、語り伝へたるとや。

(要約)

今は昔、僧都殿と呼ばれる極めて悪い場所があり、住む者もいなかったが、そこに高い榎の木があった。夕暮れになると、赤い単衣(ひとえぎぬ)が寝殿の前からその榎の木のほうへ飛んで行って、梢に登る。人びとは恐がって近寄らなかったが、ある男が「我こそはこの単衣を射落としてみせよう」と言い、夕暮れ時に待っていると、竹の少し生えた所から赤い単衣がいつものように飛んできた。男が矢を放ったところ単衣の真ん中を貫いたと思ったが、単衣は矢の突き刺さったまま、いつも通り榎の梢に登ってしまった。矢が当たった辺りの土を見ると、血がたくさんこぼれていた。男がこの一件を人々に話すと、皆たいへん恐がった。男はその夜、眠ったまま死んでしまった。そういうわけで、このことを聞く人は皆、「無益なことをして死んだ者だなあ」と言っただけだったのである。命より大事なものはないので、意味もなく勇猛なところを見せつけようとして死んでしまった、極めてつまらないことだと、語り伝えられている。

話の中で発生する怪異は赤い単衣が空を飛ぶというもので、その正体は判明しない。攻撃行為によっても解決せず、関わった男が不意に死亡することで物語は終わる。油瓶の話や板の話と同様に、器物の姿で現れる怪異であって、その正体も不明であるため、「精怪」譚の枠から

は外れる説話である。これまでに何度か言及した、器物の異常な動作が不幸の予兆として認識される系統の話に近いものと考えられるだろう。特に第2章第3節で取り上げた『異苑』の薄絹の話は、怪異の姿が空中の赤い布であるというイメージや、「精怪」譚であれば解決策になり得たはずの「射る」「焼く」という行為が通用せず逆に人間側が急死を遂げることになるという筋書きにおいて、非常に似た内容の説話であると言える。

この話の題名は「冷泉院の東洞院の僧都殿の霊の語」となっている。本編中に「霊」の語は出てこないで、題名でのみ、赤い単衣のことを「霊」と呼んでいることになる。『今昔物語集』巻2における「霊(りょう)」という語彙に関しては第3章第1節(1)でも触れたように、人間が死んでから幽霊になったものや、漠然と怪異の原因となっている存在を示すのに使われており、ここでも後者の意味であろう。赤い単衣を尋常の器物としてではなく、無形の怪異的存在である「霊」の現れとして解釈していると考えられる。

この説話における人間と怪異の関係を今一度確認してみよう。矢を放った男は、単衣が飛ぶという怪異の見える家に宿直していた者であって、つまりその土地に住んでいたわけではない、部外者であると考えてよいだろう。男が死ぬことになった原因は、自ら単衣に攻撃を仕掛け、関わりを持ったことである。男の死は怪異的存在による報復であって、怪異の現れた時点で既に暗示されていた凶事であるとは言い難い。一方、中国の薄絹の怪の話では、張仲舒の住んでいる家の庭に薄絹が降ってきた時点で、既に凶兆の焦点は彼に当たっている。燃やした薄絹からの報復で死亡したというよりも、薄絹を燃やしても予兆を覆すことができず死亡した(薄絹自体の力によって殺されたわけではない)と解釈すべき説話であろう。両者は似通った説話であるが、日本の単衣の話のほうが

より直接的に怪異が人間に対して手を下している感覚で書かれているように読み取れる。そうすると、この『今昔物語集』の単衣の話というのは、中国の「凶兆として器物が異常な動作をする」話と日本の「異常な動作をする器物が人を殺す」話との中間点に位置する説話として読むことができまいだろうか。元来中国において予兆としてのみ認識されていた器物の怪異が、日本に輸入されてから徐々に直接的に人を殺すものと認識されるようになっていった結果、その説明として目に見えない「鬼」や「物の気」を正体とする解釈が付加されるようになったのが油瓶や板の話である、と考えると辻褄が合う。

第3節 総括・日本の器怪譚再読

本章第1節で見たように、『今昔物語集』の提の話と『化物草紙』の杓子の話、銚子の話、案山子の話は、器物を原因とする「変化」譚となっていて、これらは『太平広記』の「精怪」譚と同じ系統に属するものであった。中国の「精怪」譚を踏まえた上で、日本のこれら四話を見直してみると、どのような発見があるだろうか。

まず、変化の現れ方を見ると、身長三尺の太った五位が歩く、白い手が栗を乞う、耳の長い法師が戸の外から覗く、揉鳥帽子を被って弓矢を持った者が宿を借りる、となっている。形態上の特徴として、子供や女または動物の姿で現れる変化がないことが挙げられる。表2によると「精怪」項では変化が子供の姿をしていると特筆される説話は9話、女の姿であると特筆されているものは10話、馬や犬など何らかの動物の姿として描写されるものは7話あって、どれも決して珍しくない描写であった。しかし日本の器怪譚にはいまのところそれらが見られず、多様性に乏しいと言える。

また、怪異が名前を名乗らないということも日本の器怪譚の共通点である。表2によると「精怪」譚の中には、

怪異自身が「文約」「多受」といった固有名を名乗るというものが二話ある。これは妖怪の種類を示すような一般的な名称とは異なるもので、あくまでもその物語に登場する一個体の怪異自身が持ついわば個人名である。この時点の日本の器怪譚においては、変化がその名を名乗るという描写は見受けられない。

さらに、日本における器物の変化がいずれも無害なものとして描写されていることに注目したい。提の話の五位については陰陽師の台詞でこれは害を為さないと明言されているし、杓子の話の白い手については可愛らしくて怖くないという感想が明記されている。銚子の話の法師に関しては盗人だろうかという見当違いの恐怖が語られるが、法師は覗き込むだけで実害を及ぼそうとはしなかった。案山子の話ではむしろ、案山子でもいいから夫になって欲しいと願ったことが半ば叶った形であって、比較的有益なものであったとも考えられる。器物の変化に対する認識として、これらが人間にとってさほど脅威的な存在とされていなかった傾向が見て取れる。一方中国の「精怪」譚のほうでは、有害な変化も無害な変化も両方確認することができる。

怪異の解決策に関して、銚子を捨てるという簡単な処置行動が見られる以外には、怪異への攻撃行為も見られないし、正体への処置行為も行われていなかった。中国の「精怪」譚において表4によれば約50%の説話にへ攻撃³または処置⁴の描写があったということ踏まえ、日本の器怪譚において人間側が特別な解決行動を行わないということはひとつの特徴であると言えるだろう。この点に関しては、上記の通り器物の変化が無害なものであったということも関係があると推測できる。器物の変化を積極的に解決すべきものとして恐れるような感覚が、これらの説話には見られないのである。

怪異の正体を見てみると、埋没した銅の提、埋没した杓子、経年し破損した銚子、偶像の案山子となっている。「精怪」譚においてよく見られた「埋没」「経年」の属性が日本の器怪にも備わっていることから、影響関係あるいは共通の感覚の存在が読み取れる。各説話において確認してきた通り、話型が「精怪」譚のそれと同じく「発生」↓「判明」の形式をとっていることから考えても、本章第1節で紹介してきたような日本の器物変化譚は、やはり中国の「精怪」譚に代表される類の器物変化譚と同じ流れの中に位置づけられるものであろう。

本章第2節で見た『今昔物語集』の油瓶の話、板の話、単衣の話は、器物の姿で現れる怪異であって「精怪」譚とは別物であるものの、中国のある種の怪異譚との類似が見受けられるものであった。より近縁の説話が中国文献に存在しないとも限らないが、現時点で比較して分かることを挙げておきたい。

中国説話において、器物が異常な動作を起こす怪異はその正体に言及されることなく、凶事の予兆として解釈されていた。日本における類似の怪異は「物の気」や「鬼」が姿を変えて現れたものとされ、それ自身が人間を殺すものとして語られていた。先に述べた通り『今昔物語集』の単衣の怪がこれらの中間にあたる描かれ方をしていることから、中国由来の説話が日本流に形を変えていった結果が油瓶の話や板の話であると推測することもできるだろう。

器物の姿で現れる怪異に対してそれを器物そのものであるとは考えず、「鬼」や「霊」の仮の姿であると解釈していることに着目すると、やはり当時の日本人の器物に対する目線というのは極めて冷静で、器物そのものが特殊な力を持って動き出したり人を殺したりするようなことは想定されていなかったのだろうと考えられる。油瓶や板などの器物そのものへの畏怖のような感覚が存在

していなかった、いわば器物を軽視していたがゆえに、その正体は「鬼」などの別の何かに仮託されるのが自然な感覚であったのだろう。

「器物を原因とする怪異」にしても「器物の姿で現れる怪異」にしても、その起源にあたるものは中国の説話に見出すことが可能であった。器物の怪は日本人の中に自然発生した概念ではなく、中国からの借りものにすぎなかったと言えるだろう。そしてその記録の少なさからして、器怪の概念は当時の日本においてあまり浸透しておらず、決して身近なものではなかったと考えられる。このことは、日本における器怪譚が器物に対する切実な恐怖を伴っていないということからも見て取れるだろう。しかしながら、これらの説話がいずれも中国文献からの流れを受け継いだ、いわば伝統的な器怪の表象であったことは事実である。日本の器怪表象の根源の部分はこのようなものであった。

第4節 器怪の図について…『化物草紙』を手がかりとして

これまで詞書のみに着目してきたが、絵巻物『化物草紙』において杓子、銚子、案山子の変化がどのような図として描かれているかをここで見ておきたい。



図1 『化物草紙』の杓子の怪

図2 『化物草紙』の銚子の怪



図3 『化物草紙』の案山子の怪



図1と図2の画像は島田修二郎編『新修 日本絵巻物全集別巻2』(1981年、角川書店)より、図3の画像は秋山光和編『在外日本の至宝 第2巻「絵巻物」』(1980年、毎日新聞社)より引用した。図1は、杓子が化した白い手の怪異を描いたものである。緑色になってしまっただけのもの、形態としては詞書通り単なる手の形で描かれている。図2は銚子が化けて現れた耳の長い法師で、これも詞書に忠実な姿で描かれていることが確認できる。図3は案山子が化けて現れた、烏帽子をかぶり弓矢を持った男である。これら三例は詞書上でも絵画表現上でも、仮の姿で現れた段階では正体が器物であるとは

認識され得ない姿かたちをしている。器物が変化したものを描いていながら表現上は露骨な器物的要素を持っていないということが、説話型の妖怪の図における特徴である。これこそが説話における伝統的な妖怪イメージであるものの、これらは言葉で語られることが主であるため、こうして図に表された例はあまり見られず、先行研究において十分に認知されていない^⑤。

一方で、一般的には以下のような図が「器物の妖怪」として認識されていると言えるだろう。

図4 『泣不動縁起絵巻』の妖怪



図5 『融通念仏縁起絵巻』の妖怪



図4は『泣不動縁起絵巻』（サンフランシスコ・アジア美術館蔵、室町時代）、図5は『融通念仏縁起絵巻』（クリーブランド美術館蔵、鎌倉時代）の一場面である。

画像はいずれも秋山光和編『在外日本の至宝 第2巻「絵巻物」』（1988年、毎日新聞社）によった。顔の上下に黒い角が二本ずつ付いているのが角盃（つのだらい）を元にしたと考えられている妖怪図像、頭上に曲がった三本の角が付いているのが五徳を元にしたと考えられている妖怪図像である。このように器物の形状に顔や身体を付け加えて生み出されたものが「器物の妖怪」を表した図としてよく言及されている。しかし、これらの絵巻物の詞書において器物にまつわる怪異は一切登場しておらず、このような絵画表現が「器物を原因とする妖怪」を表しているのか、「器物の形状に似た姿で現れた別の何か」を表しているのかというようなことを判断することは難しい。具体例を挙げると、この『泣不動縁起絵巻』（図4）と『融通念仏縁起絵巻』（図5）に描かれているものは詞書上は疫病神や疫神とされているが、それが器物を起源とする疫病神^⑥なのか、器物に似た姿で描かれる。

⑤ 阪倉篤義、本田義憲、川端善明校注『新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部三』（1981年、新潮社、p.303-304）の付録には、言語世界と絵画世界での妖怪の姿の相違についてしっかりと区別して論じた文章が見られる。

⑥ 器物を原因とする病気の発生を語る怪異譚は、中国の「精怪」譚にもいくつか見られた。

ただだけの疫病神なのかということ、判断材料に欠けたためどちらとも断定できない。これらが「器物の妖怪」であると認識されている根拠は、その絵として表現された外観だけである。

本節前半で示した説話型の表現からも分かるように、怪異的存在の正体は外見からは判断できないものである。器物に似た見た目で描かれているものが器物を原因とする怪異であるとは限らない。これらの詞書を持たない器物的な図に関しては、個々の筋書きを持たない雑多な妖怪を描く際に表現技法として器物的な形状のみを利用してすぎないものである可能性が高いであろう。このような絵巻型の器物の図が、説話型のそれとは見た目も身も全く異なる表象であるということを、ここに強調しておきたい。

第4章 『付喪神記』を読む

『付喪神記』とは、室町時代に製作されたとされる絵巻物形式のお伽草子で、器物の妖怪をその題材としている。崇福寺蔵の伝本（『付喪神絵巻』）とその他の伝本との間に詞書の差異があり、その前後関係が議論されているが、本論文では崇福寺本の詞書をより古いものと考え、立場からこちらを主に取り扱って議論を行うこととする³⁾。原文は、岐阜市歴史博物館編『企画展 鬼神とまじない』（1990年、岐阜市歴史博物館）に収録された翻刻を参照した。簡単にあらすじを述べると、捨てられた古道具たちが妖怪（はけもの）となって人間に復讐するが、護法童子に降伏（ごうぶく）されて発心修行成仏する、という筋書きになっており、終盤は真言密教の観点からなされる記述が顕著となる。

『付喪神記』は器物の妖怪を描写した物語として最も

① この立場の根拠となる論考として、京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むらちものがたり第十巻』（臨川書店、2001年、392-400頁）が挙げられる。

有名なもので、器怪に関する論述において高い頻度で参照されている。しかし、その取り扱いは固定観念に干渉されがちで、疑問を感じざるを得ないものが多い。本章では、第2章から第3章にかけて論じてきた中国の器怪譚から日本の器怪譚への流れを前提とした上で、新たな視線を交えつつ改めて『付喪神記』の内容に検討を加え、日本の器怪譚の中における位置づけを考えてゆきたい。

第1節 『付喪神記』の特異性

ここまでに見てきた器怪譚は全て人間を主人公として人間目線で語られるものであったが、『付喪神記』は逆に器物ならびにそれが変化したものを主人公としており、怪異側の目線で語られる物語となっている。この時点で、話型としては当時のあらゆる器怪譚とも異なる独自のものである。

（1） 器物への関心の薄れ

『付喪神記』の主人公である器物たちは基本的に「ふる具足」、「器物とも（引用者注…「器物共」の意）」のように総称されていて、妖怪に変わった後は「妖物共」、発心したあとは「諸僧」というように、詞書上で個性を与えられておらず、具体的な道具の種類も不明である。その中で三つ（崇福寺本の場合）だけ、名前と個性を持って登場する器物がある。器物たちが妖怪化するための知識を提供する「古文先生」、僧のような振る舞いをし、最終的に発心した妖物たちを導く役割を担う「数珠の入道一蓮」、一蓮と対立して後に和解する「手棒のあら太郎」である。

これらはいずれも器物の妖怪の発心修行成仏譚という物語を進める上で重要な役割を担っており、逆に言えば、物語を構成する際の必要性から生み出されたキャラクターである可能性が高い。「先生」、「入道」、「荒くれ

者」という物語上での役割が先にあって、役割から連想した適当な器物が当てはめられているのである^⑧。そう考えると、たとえば「数珠は化けて出るものだと信じられていたから数珠の化物が描かれた」というような、具体的な俗信の存在を前提とした解釈はあまり適当ではない。古文書、数珠、手棒（手に持って使う棒）がどれも化けて出た前例の無い道具種目であるということ、ならびに物語上での役割を持たない器怪たちが道具種目に言及されない漠然とした「器物の妖物」とされていることを鑑みると、『付喪神記』において具体的な器物そのものに対する感覚・関心というのは非常に薄いものであって、「器物の妖物」たちは現実味を前提としない理屈に基づいて意図的に創造されたもののではないかと考えられる。

かつての器怪は、例えば『化物草紙』の銚子の怪のように、仏具でなくても法師の姿で現れるような非論理的なものであった。変化前の器物と変化後の化物との間に物語の製作者の意図が強く介入するようになった結果、器怪の現れ方はより論理的・人工的なものへと変わっていったのである。

様々な種類の器物が一堂に会し、それらが一斉に妖怪となって現れてくるような発想というのは、これも『付喪神記』に特有のものであろう。日中の伝統的器怪譚においては、一つの説話に登場する器物は一種類が基本であり、多くても四種類程度であった。怪異の正体として一つ一つの器物に目線が向けられていたかつての説話と、

⑧ これは『付喪神記』独特の過程である。中国の「精怪」譚や日本の器怪譚において、化ける道具の種類とその変化が取る行動との間には全く関連性がないものがほとんどであった。関連があったとしても【七】「居延部落主」の皮袋の変化が人を呑み込んだり、【二十一】「岑順」の将棋盤の変化が将棋の試合の動きを再現するなどであって、物語に必要な役職や性格から器物を連想したというよりも、具体的器物ありきで怪異の行動が決められていると考えるほうが自然であろう。

具体的器物名を明示せず漠然とした器物の群れを描く『付喪神記』とを比較すると、やはり『付喪神記』において具体的器物への関心は明らかに希薄であり、もはや数に訴えなければ器物は凄みを持つことができなかったのだろうと思われる。

(2) 器怪の性質の変遷

『付喪神記』における怪異は、器物を原因とする変化（へんげ）であるという点で、日中の多くの器怪譚と共通している。しかし、その性質面を様々な角度から検討すると、独特な点がいくつも見えてくる。

怪異の外見は「或は男女老少の姿を現し、或は魑魅悪鬼の□相を変し、或は狐狼野干の形をあらわす、色々さま／＼なるありさま、おそろしとも中々申はかりなし」とされ、簡潔には「異類異形の妖物共」と表現されている。これは、外見の多様性に乏しかった『今昔物語集』や『化物草紙』における器物の変化とは打って変わり、『太平広記』の器物の変化に見られた男性、女性、老人、子供、怪物、動物といったあらゆるパターンの変化をまとめて登場させる書き方であって、中国寄りの発想でありながら新しい表現手法であると言える。また、数珠の入道一蓮が妖物たちの姿を見て発した台詞に「あまりにおそろしき御すかた共かな、をなくは、などや人に妖給さりけるぞ」とあることから、妖物たちの姿は人間のそれとは見るからに違うものであったことが読み取れる。日本の提の話や銚子の話に出てくる変化が「少し変わった外見の人間」程度に認識されていたり、案山子の話に出てくる変化が人間の男そのものとして認識されていたことを考えると、『付喪神記』における変化が人間とは異なる、しかも恐ろしい姿のものとして表現されていることは大きな違いである。

妖物たちの行動としては、捨てられた仇を返すという

目的のもと、人や家畜をさらって食べてしまうという人間側にとつて極めて有害なものとなっている。器怪が人間を取って食う描写は中国にも日本にも見られなかったもので、先に述べた恐ろしい姿といい、『今昔物語集』巻二に見られるような人を食らう存在としての「鬼」のイメージを取り込んでいる^⑥。この点は日本で独自に起こった進化であると言える。

また、血肉で宴を催し、詩を作ったり、囲碁、双六、鞠、小弓などの遊戯を遊び尽くすといった一面も描かれる。詩を読むという行動については『太平広記』の【二十三】「元無有」や【三十五】「姚康成」との関連が田中貴子「『付喪神記』と中国文献——『器物の怪』登場の背景をなすもの——」（和漢比較文学会編『説話文学と漢文学』、1994年、汲古書院）で言及されているが、表2によると『太平広記』「精怪」譚の中には他にも5話ほど詩歌を嗜む怪異が描写される説話が存在していて、怪異が漢詩を読むというのは中国の説話において実際に少なくない描写であったことが分かる。

中国の「精怪」譚や日本の変化譚には、怪異の正体が器物であると判明する場面の描写が必ずと言ってよいほど存在していたが、『付喪神記』にはそれが存在しない。というのも、器物たちは物語序盤で妖物へと変化してから、その後一切もとの姿に戻るといことがないのである。変化譚における共通認識として、変化後の姿はあくまでも一時的な仮の姿であって、物語の最後には元の姿に戻っているのが一般的であった。特に、変化が攻撃を受けた場合はそれが引き金となって正体が判明するものであったが、『付喪神記』の妖物たちは護法童子の輪宝と火炎による攻撃を受けても、まったく元の姿に戻る気

配がない。『付喪神記』における妖物への変化は、もはや仮の姿などではない、不可逆的な変身として描かれているのである。これまでの器怪譚では、人間の前に怪異が現れた後、最終的に元の姿に戻る場面を描くことによって初めて、その怪異は器物によるものだと言者に認識されたのであった。その点『付喪神記』は器物を主人公としたことよって、変化の前に器物であることを描写してしまえば、その後元に戻らなくても「器物の妖怪」として読者に認識してもらうことができる。話型の縛りをなくしたことよって、新たな器怪表現が生まれたのである。

ここまで見てきた通り、『付喪神記』の器怪表象は日中の伝統的な説話におけるそれとは様々な点で大きく異なっている。中世日本における器怪表象の根源的な流れの中に、突如として現れてきた特異点が『付喪神記』であった。

第2節 前置きとしての「付喪神」概念

『付喪神記』冒頭の「陰陽雜記云、器物百年を経て、化して精霊を得て、よく人の心を誑す、是を付喪神と号といへり」という文章は、極めて多くの言説に引用され、後世の器怪観に多大な影響を及ぼしている。

この文章が物語中で果たしている役割は何であろうか。物語冒頭、主人公である器物たちが登場するまでの流れは、器物が古くなると「付喪神」となり有害である↓したがって人々は毎年「煤払」をして古いものを捨てる↓ある時、捨てられた古道具たちが集まって話を始める、というものになっている。つまり、捨てられて人間への復讐を企てる器物たち（主人公）が登場するための場面設定として「煤払」の説明がなされていて、「煤払」が行われるための動機付けとして「付喪神」の説明がなされているのである。「付喪神」も「煤払」も、ひとたび

⑥ 小松和彦「器物の妖怪——付喪神をめぐる」(『月刊百科』237号、1982年7月、平凡社)等では、「大江山絵巻」の酒吞童子との類似性も指摘されている。

器物たちが物語に登場してからは、二度と本文に登場しない。冒頭の一文で「付喪神」について述べたのはあくまでも物語を開始するための前置きのためであって、これは本来この物語においてさほど重要な文章ではなかったのではないだろうか。ましてや、俗信として広く信じられていた概念であるとは到底考えられない。現在知られている『付喪神記』『付喪神絵巻』といった題名についても、現存する最古の伝本であるところの崇福寺本の内題が『非情成仏絵』であることから考えて、製作者の意図とは別に後付けされた題名であることが推測できる。

とはいえ、この冒頭部分に見られる「百年を経た器物」を特別視する感覚については、物語内で継続的に保持されているようである。器物たちが妖物に変化する場面では「かれらすでに百年の経たる功あり」、数珠の一蓮が成仏する場面では「御とし一百八と申に」と、百年以上を経ていることが強調されている。長い年月を経たことが変化の理由として持ち出されることは『太平広記』の「精怪」譚にも見られた一般的傾向であるが、具体的に何年を経たという部分が強調される例は少なくとも「精怪」の中には見られないものであった。『搜神記』にも具体的年数に言及する文章はあまり見られないが、巻二に「千歳之姪入海為蜃百年之雀入海為蛤……」といった表現があり、『付喪神記』の遠縁であろうと思われる。この「百年を経る」描写に関して『付喪神記』の記述とかなり近い位置にあるのは、冷泉家流と呼ばれる『伊勢物語』注釈書であろう。『伊勢物語』第33段の「百年に一年足らぬつくもがみ」という記述への冷泉家流の注釈が『付喪神記』冒頭の文章と似通っているということには田中貴子「『付喪神記』と中国文献——「器物の怪」登場の背景をなすもの——」（和漢比較文学会編『説話文学と漢文学』、1994年、汲古書院）で指摘されている。

田中の前掲論文では、百年を経た獣が変化となって夜行

するとの記述を持つ宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』が取り上げられていた。ここでは同じく冷泉家流の伊勢物語注である鉄心斎文庫蔵『伊勢物語奥秘書』の記述を見てみよう。片桐洋一、山本登朗編『伊勢物語古注釈大成 第一巻』（2004年、笠間書院、pp. 217-218）の翻刻を参照した。

（抜粋）

人の家具は、何にてもあれ、年をふれば、変化して、人を悩すなり。されども、百年にたらねは、人に見あらはされて、人をたぶらかす事、思ふやうにならず。是を、つくも神と云也。又は、百鬼夜行神とも云なり。か様の古事を思て、此女を、つくも神にたとへて、忍て垣よりのそく顔の見えければ、百年に一年たらぬとは云也。女の年は、此時、五十八なるへし。思懸を、とかく云ける煩はしさを、歎て読る歌也。『伯撰』云、狐等の獣、百年に成者、百鬼夜行神と成て、人を煩はす。それを付喪神と云々。

あらゆる家具は年を経ると変化するが、百年に満たないとうまく人を化かすことができないとのことである。この記述に関しては、他の冷泉家流伊勢物語注とは異なっている独特な文言であると同時に、『太平広記』巻44の「木師古」という話に類似の言説が認められる。原文は李昉等編『太平広記五』（1959年、人民文学出版社）を参照した。

（抜粋）

按神異秘経法云。百歳蝙蝠。於人口上。服人精气。以求長生。至三百歳。能化形為人。飛遊諸天。據所未及三百歳耳。神力猶劣。是為師古所制。

蝙蝠は三百歳になると人に化けることができるが三百

歳に満たなかったので師古(人名)に倒されてしまった、という記述は、『伊勢物語奥秘書』の「つくも神」の説明とよく似ている。直接的な関係性は不明であるが、冷泉家流の伊勢物語注釈書の記述が中国文献の影響を受けている可能性を示す資料としてここに挙げた。

『付喪神記』が強調する百年という数字は、その(直接的とは限らないが)出典と思われる冷泉家流伊勢物語注が「百年に一年足らぬつくもがみ」を解釈した結果であって、元を辿れば『伊勢物語』第六十三段へと行き着くのであった。

冷泉家流伊勢物語注についても一つ着目したいことは、それらが「つくもがみ」と「百鬼夜行」とを結びつけて語っているということである。この影響を受けたと思われる『付喪神記』にも「百鬼夜行」という言葉が用いられていて、器物たちが妖物の姿に変わった場面でのように用いられている。「百鬼夜行なとと申事は、むかしより、たゝ人のいゝつたへたる空ことかと思侍るに、まのあたり、かやうの事の候けるそや、あさましさよ」。『付喪神記』の時代の人々にとって、百鬼夜行の言い伝えはすでに絵空事であつたらしい。そしてこの文章が書かれているのは現存する『付喪神記』諸伝本のうち最も古い崇福寺本だけである。『付喪神記』に関する議論のひとつである崇福寺本とその他諸本との内容面での前後関係を考えるうえで、『付喪神記』が参考にしたと思われる冷泉家流伊勢物語注にあつた「百鬼夜行」の文字列が残存しているという事実は、崇福寺本がより古態に近いことを示す根拠のひとつとなり得るだろう。

『付喪神記』冒頭の一文で謎なのは、「精霊を得て」という部分である。これはここまでに見てきた中国文献や伊勢物語注などの中には見られなかった新しい語彙と表現であつて、当時の用例を精査した上で論じなければ

ならない。

第3節 『付喪神記』における器怪の図

『付喪神記』も絵巻物であるので、この物語に登場する器物や妖物がどのような図として表現されているかを、ここで見ておきたい。室町時代に制作された崇福寺本と江戸時代に複写された諸本とで絵柄に大きな違いがあるが、まずは崇福寺本のほうから取り上げる。図版は岐阜市歴史博物館編『企画展 鬼神とまじない』(1990年、岐阜市歴史博物館)から引用した。



図6 崇福寺蔵『付喪神絵巻』の器物

冒頭、器物たちが集まってから妖物になるまでの間は、図6のような器物のままの姿で描かれている。一蓮とあら太郎が争う様子も完全に元の器物のまま描かれていて(図1左下)、非常に詞書に忠実な絵画表現であると言える。器物たちに変化の方法を教える古文先生にのみ、図7のように顔が描かれていることには注意しておきたい。

器物たちが妖物になった後は、図8、図9のように獣とも鬼ともつかない、とにかく人ではないものの姿で描かれる。これもまた、本章第1節で述べたような本文中の妖物の描写(男女老少、魑魅悪鬼、狐狼野干さまさまの、人ならざる姿)に忠実な描かれ方であると言えるだろう。これは第3章第4節で述べた、『化物草紙』に見られたような説話型の器怪の図と同様のものであり、外見だけからではこれらが器物の変化であるとは想像し得ない。

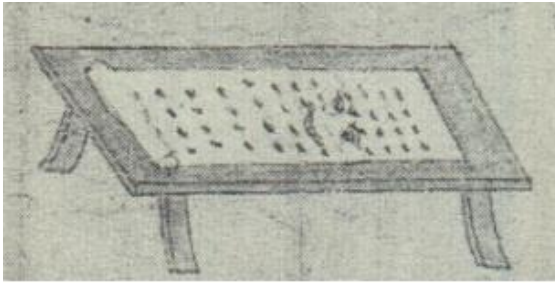


図7 崇福寺蔵『付喪神絵巻』の古文先生

図8 崇福寺蔵『付喪神絵巻』の妖物



図9 崇福寺蔵『付喪神絵巻』の妖物



図10 崇福寺蔵『付喪神絵巻』の妖物



図11 崇福寺蔵『付喪神絵巻』の妖物



ここで注目すべきは、この妖物たちの図の中に、図10のように花瓶の形の頭をしたものと図11のように擬宝珠（ぎぼし）の形の頭をしたものが混じっていることである。これは第3章第4節で言及した、器物に顔や身体を付加する表現手法によって描かれた妖怪である。他の絵巻物におけるこの系統の図像については、器物にまつわる詞書を伴わないために、器物を原因とする妖怪を現しているのかどうか判断し得ないということを既に述べた。しかし、『付喪神記』では状況が異なっている。図10や図11の妖怪も、図8や図9の妖怪と同じく、器物

から変化した妖物を描いているということが物語上明らかなのである。

崇福寺本を製作した絵師はほとんどの部分においては詞書に忠実な絵画表現を行いつつも、少しだけ詞書にない新しい要素を盛り込んだのだろう。それが、花瓶や擬宝珠の形状を利用した妖物の表現である。元々雑多な妖怪の一部のみに使われていたこの表現手法を、器物の變化したもの（詞書上では、器物とはかけ離れた姿に變化しているはずのもの）を描く際に用いたというのは、器怪の絵画表現にとって大きな事件であった。根本的に別々のものであったはずの「説話上の器物の變化」と「絵巻上の器物的な姿の妖怪」とがここで初めて明確に重なりあうことになったのである。

この重なりはあくまでも、絵巻物における「絵」が「詞書」を無視することによって成り立っているものであった。しかし、時代の流れとともに詞書の力によって絵が矯正されていくというようなことは起こらず、逆に絵の方が詞書を無視したままその力を増していく。具体的には、崇福寺本以外の『付喪神記』諸伝本の絵柄において、器物の形状を持つ姿で描かれる妖物の数が激増する。実際のところは妖物のみならず、変化する前の器物たちにおいても、ほぼ全てが器物の形状に顔などを付加した図として描かれている（崇福寺本では古文先生のみがこのような形態で描かれていた）。絵としての面白さや分かりやすさ（それが正確な理解であるとは限らない）が、人々の心をよほど強く掴んだのだろう。

ここまで来ると、この系統の妖怪図像を「器物が化けたもの」として受容する感覚は一般化し、「器物から變化した妖怪」と「器物のような姿で描かれる妖怪」とはもはや同一のものとみなされるようになってしまったのだらう。『化物草紙』に見られたような説話型の器怪イメージは駆逐されて、近世の草双紙や妖怪画集は『付喪神記』型の新しい器怪イメージを主な基盤として制作

されたと考えられる。そしてこの潮流は現代にまで続いている。

第4節 器怪表象の転換点

本論は日本の器怪表象の源流部分を理解するために、中国の怪異譚集『太平広記』の「精怪」項に含まれる器怪譚の傾向を探るところから始まった。仮の姿で現れる怪異の具体的正体を突き止めることを主眼としたのが「精怪」の説話であり、怪異を為すのは古びたり埋没した雑多な器物、あるいは偶像の類が主であった。また、「精怪」とは別種の器怪譚として、器物の異常な動作が凶兆として理解される説話にも眼を向けた。

日本で「器物の妖怪」として理解されている表象には「器物を原因とする怪異」と「器物の姿で現れる怪異」の二種類が存在し、それぞれを中国器怪譚と対比させることでその日本の変遷を探ることが可能であった。説話集『今昔物語集』や絵巻物『化物草紙』に収録された室町以前の器怪説話を中国器怪譚と比較した結果として、器物を原因とする怪異が人間にとってほとんど無害であり、害をなすとしたらその正体は器物ではなく別の何かであるというような感覚、すなわち器物に恐れを抱かない感覚というものが日本には早い時期から存在していたのではないかと仮説が立ち上がってきた。

中国の説話から細々ながら日本へと受け継がれていた伝統的な器怪表象のあり方を覆した作品として、器物を主人公に据えて器怪を描いたお伽草子『付喪神記』がある。意図的に選択された器物が群れをなすこの物語において器物そのものへの関心はもはや失われており、鬼へと姿を変えた器物はもう元に戻らない。『付喪神記』は中世以前の日本の器怪表象の流れにおける特異点にあたる作品であり、決して普遍的な器怪表象とはいえないものであった。

『付喪神記』以前の日本の器怪譚は、その資料数の少なさからこれまでの器怪研究においてあまり重要視されていなかった。これらと系統を同じくする中国の数多くの器怪譚を参照することで、日本の古典的器怪譚が確固たる起源を持つ伝統的な器怪表象であるということを示すことができたのは、本論文の成果のひとつである。これによって、これまで器怪表象の代表の一つとして扱われがちであった『付喪神記』を、器怪の伝統に反する特異な表象として位置づけることが可能となった。日本の器怪表象の初期の部分であるところの中世以前における大きな流れを、具体的資料に即して提示したということとを以て、本論文の主たる結論としたい。

『付喪神記』は近世以降の器怪表象に大きな影響を与えている。第4章第3節で述べたような新しい絵画表現のみならず、第4章第1節で見てきたような『付喪神記』の詞書における特異な要素、例えば器物を主人公とした物語であるという点なども、江戸時代以降のある種の器怪表象に受け継がれ、一般的なものとなってゆく。江戸期の妖怪表象がその娯楽性を前面に出した独特なものであるということはいくつかの先行研究で明らかにされているが、その中世における萌芽のひとつが『付喪神記』であったと言えるだろう。

近世以降の日本の器怪表象は資料数もその形式も非常に豊富である。これに関する詳細な議論は今後の課題であるが、簡潔に推し量るならば、中国から改めて取り入れた怪談やそれが口承化した昔話のような「説話の系譜」と、絵巻物から発展した草双紙や妖怪画集のような「絵巻の系譜」の二つの流れが互いに独立して存在しており、特に後者が勢力を上げながら現代へと連なっているように思われる。近世以降に急増する器怪表象の発端となつたのが『付喪神記』のある意味革新的な器怪表象であり、この作品は日本の器怪史全体においては転換点として位

置くことができるものである。

このような見通しを示し、本論文の結びとする。

参考文献

- 秋山光和編『在外日本の至宝 第2巻「絵巻物」』1980年、毎日新聞社
- 浅見和彦「器物の妖怪——器と日本文学」『高校通信 東書 国語』1990年7月、東京書籍
- 荒俣宏、小松和彦『妖怪草紙 あやしきものたちの消息』1987年、工作舎
- 稲垣泰一「『今昔物語集』の怪奇」『アジア遊学』No. 71、2005年1月、勉誠出版
- 井波律子『中国幻想ものがたり』2000年、大修館書店
- 今村与志雄訳『酉陽雜俎4』1981年、平凡社
- 入矢義高訳注『洛陽伽藍記』1990年、平凡社
- 梅原北明「妖怪雑史」『文藝市場』2巻3号、1926年、文藝市場社
- 江馬務『日本妖怪変化史』1923年、中外出版
- 大橋由治「『搜神記』の精怪観——怪異と神道設教」
『大東文化大学漢学会誌』51号、2012年3月
- 笈真理子「『付喪神絵巻』の諸本について」
岐阜市歴史博物館編『岐阜市歴史博物館 博物館だより No. 15』1990年、岐阜市歴史博物館
- 片桐洋一、山本登朗編『伊勢物語古注釈大成 第1巻』2004年、笠間書院
- 岐阜市歴史博物館編『企画展 鬼神とまじない』1990年、岐阜市歴史博物館
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編
『京都大学蔵むろまちものがたり 第十巻』臨川書店、2001年
- 久保田満明「絵画に現はれたる妖怪変化」『歴史公論』4巻8号、1935年、雄山閣
- 国立国会図書館「国立国会図書館デジタル化資料 - 付喪神記」国立国会図書館デジタル化資料
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2541764>> (2015年12月参照)
- 小松和彦「器物の妖怪——付喪神をめぐる」『月刊百科』237号、1982年7月、平凡社
- 小松和彦『日本妖怪異聞録』1992年、小学館
- 小松和彦『妖怪学新考——妖怪から見る日本人の心——』1994年、小学館
- 小松和彦「捨てられた「古道具」のお化けたち——「もったいないお化け」の背景」
『歴博』85号、1997年、国立歴史民俗博物館
- 小松和彦『異界と日本人——絵物語の想像力』2003年、角川書店
- 小松和彦、徳田和夫「対談 室町の妖怪——付喪神(つくもがみ)、鬼、天狗、狐と狸」
『国文学 解釈と教材の研究』50巻10号、2005年10月、学灯社
- 小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』2008年、集英社
- 小松和彦編著『妖怪学の基礎知識』2011年、角川学芸出版
- 今野圓輔『日本怪談集——妖怪篇——』1981年、社会思想社

阪倉篤義、本田義憲、川端善明校注『新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部三』

1981年、新潮社

櫻井秀「信仰と風俗」『日本風俗史講座 第二十二号』1928年、雄山閣

澁澤龍彦「付喪神」『文芸』15巻2号、1976年2月、河出書房

島田修二郎編『新修 日本絵巻物全集 別巻2 天神縁起絵巻 八幡縁起

天稚彦草紙 鼠草紙 化物草子 うたたね草紙』1981年、角川書店

角田達朗「干宝『捜神記』における「妖」の思想」『愛知淑徳大学論集』2号、

2012年3月、メディアプロデュース学部論集編集委員会

諏訪春雄『靈魂の文化誌——神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究』2010年、勉誠出版

竹田晃訳『捜神記』1964年、平凡社

田中宣一「昔話と民俗」

花部英雄、松本孝三編『語りの講座 昔話への誘い』2009年、三弥井書店

田中貴子「『付喪神記』と中国文献——「器物の怪」登場の背景をなすもの——」

和漢比較文学会編『説話文学と漢文学』1994年、汲古書院

東野芳明「器怪とナンセンス——百鬼夜行図巻」『三彩』96号、1958年2月、三彩社

長澤規矩也解題『和刻本漢籍随筆集 第十三集』1974年、古典研究会

中島長文訳注『中国小説史略1』1997年、平凡社

西村康彦『中国の鬼』1989年、筑摩書房

日本名著全集刊行会編『日本名著全集 第十巻 怪談名作集』1927年、日本名著全集刊行会

橋本堯「「五行志」と「妖怪」——「太平広記」の妖怪——」

『和光大学人文学部紀要』33号、1999年3月、和光大学人文学部

花田清輝「室町画人伝」『群像』26巻1号、1971年1月、講談社

富士川游『迷信の研究』1932年、養正書院

前野直彬他訳『幽明録・遊仙窟他』1965年、平凡社

前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』1959年、平凡社

前野直彬訳『六朝・唐・宋小説選』1968年、平凡社

松崎憲三『現代供養論考 ヒト・モノ・動植物の慰霊』2004年、慶友社

三宅和朗『古代国家の神祇と祭祀』1995年、吉川弘文館

山内昶『もの与人間の文化史 122-I もものけ I』2004年、法政大学出版局

吉川幸次郎編『世界文学大系 71 中国古小説集』1964年、筑摩書房

李昉等編『太平広記 四』1959年、人民文学出版社

李昉等編『太平広記 五』1959年、人民文学出版社